鎮守府のつくりかた

ななゆー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

海軍中尉『有明誠』。彼は海軍の大半の人間から嫌われている。そんな彼に新たな左遷命令が下った。その左遷は彼のみではなく、多く人間と艦娘の運命が絡まっているとは彼を含めて誰も知るよしはなかった。

☆艦これのラブだけどラブコメではないなにかです

☆改三や改四が実装されます

☆鈴谷を中心としたハーレムものになる予定です

☆兵装関係は現実に可能なレベルで妄想の世界に入ります

☆この世界に『海上自衛隊』は存在しません

☆R―15は今後の展開を見越しての予防です
☆上記の内容を文にできるよう頑張って書きますが、更新は激遅です
☆一部キャラクター（特に電）はみなさんがご存知の彼女達とは性格がかなり異なります
ご了承くださいｍ（＿　＿”ｍ）

目次

第1章　はじまり
1―1左遷 ―――― 1
1―2出航 ―――― 13
1―3会敵 ―――― 23
1―4生活 ―――― 35
1―5上司 ―――― 48
第1・5章　1章のまとめ
1・5―1設定まとめ1 ―――― 57
第2章　有明誠という人間
2―1さらば諭吉 ―――― 67
2―2許さない…許さないんだから！ ―――― 81
2―3秋葉ハウス ―――― 95
2―4休暇と買い物 ―――― 109
2―5任命！ポーンペイ派遣隊 ―――― 122

第1章　はじまり

1―1左遷

季節は春に移り変わりそうな冬。
ゆりかもめの鳴き声が聴こえてくる横須賀鎮守府。
庁舎の片隅では『補給係』と呼ばれる窓際部署がひっそりと仕事をしている。
その部署の長は海軍中尉『有明誠』。海軍きっての嫌われ者で、補給係に絶賛左遷中である。
そんな、邪魔者有明は提督の呼出により提督室に出頭していた。
コンコンと重厚なドアをノックしたのち
「横須賀鎮守府補給係長、海軍中尉有明誠、入ります」
と声を張る。すると、中から「入れ」と短く返事が聞こえた。
部屋の主、横須賀鎮守府長官、海軍中将『幕張将司』提督はにたぁーっとニヤケながら有明を出迎える。
その顔を覗いた有明は内心で舌打ちをしていた。
なぜなら、有明を最も嫌っている人物こそが幕張提督であるからだ。

これは有明にとっていい話であるはずがない。
「いやぁ、元気にしてるかね、有明君」
「はぁ、まぁこの頃特に公私ともども異常はありませんが」
「それは、良かった」
と大げさに頷きながら、防衛省からの封筒を取り出す。
「ところでだな、今回は君の昇進なのだよ」
「はぁ、昇進ですか」
「そうだ。今から辞令を読み上げる。ごっほん、えぇー、横須賀鎮守府補給係長、有明誠海軍中尉。海軍大尉を命ずる」
「・・海軍大尉、拝命いたします」
「よろしい、では有明大尉。重要なのはここからだ」
今までの提督の言動から察するに、海軍大尉はきっと何かの準備だろう。
その何かに有明は不吉な予感しかしていない。
「えー、通達する。有明誠海軍大尉、本日付で横須賀鎮守府補給係長の任を解く。それに伴い補給係は解散、補給係業務は総務部へ移管する。」
「補給係が解散ですか・・・ 承知しました。すぐに引き継ぎ準備に入ります」
「うむ、頼むよ。で、次に君の次の仕事なんだが・・・・要港部を作ってくれ。」

「要港部・・・ですか？」

艦娘が深海棲艦と戦うこの世界では各地に艦娘が使用する軍港が多数存在する。

所属する戦闘艦の数に応じて小さい方から、軍港は要港部・警部府・鎮守府と分類される。

要港部を作れ、それすなわち要港部すらない場所に行ってこいというさらなる左遷命令であった。

その後、提督が嬉しそうに詳細について語った。もちろん、嬉しい理由は横須賀鎮守府から有明を追い出せるからだ。

詳細を要約すると

・現状安定してきた南部方面に要港部を設置し、南下への前線基地としたいので、ミクロネシア連邦ポーンペイ島に要港部を作ってこい

・とりあえず島の状態よくわかんないから、先遣隊作るので指揮をとれ

・あとはこの書類に書いてあるから夜露死苦

とのこと。

さすがの有明もまさか島流しになるとは思ってなかったので、「はぁ、わかりました」と気の抜けた返事をして、終始嬉しそうな提督を背にゆらゆらと補給係室へと戻っていったそうだ。

＊　＊　＊　＊　＊

横須賀鎮守府補給係・・・それは提督が有明の顔を見たくないので新設した窓際部署である。

例えるなら、ドラマ『相棒』の特命係のような場所。

業務はひたすら補給関係の数字とにらめっこするという、ある意味提督が有明の依願退職を狙った内容だった。

そんな有明を支えるただ1人の部下は、吹雪型２４番艦・世界を凌駕した特型、その最終タイプである特Ⅲ型のラストオーダー、駆逐艦電だ。

彼女は深海棲艦との戦いが始まった２４年前から現世に現れた初期組で、４年前に第1線から退き予備艦として事務作業に従事している。

ちなみに、何人もの提督から『ケッコンカッコカリ』を申込まれたが全て拒否したため、レベルは９９。

「有明ちゃん、さっき幕張ちゃんに呼ばれていたみたいでしたけど、なんの用だったのです？」

「電ぁ～どおしよーっ。深夜アニメが見れなくなっちゃうよ～」

「は？」

それから有明は電に島流しの件について説明をした。

捕捉をしておくと、有明は重度のオタクである。某軽巡から感染したのだが、それはまた別のお話。

「アニメうんぬんは置いとくとして、いくら幕張ちゃんが有明ちゃんのことを嫌いだからって、島流しにするのはひどいと思うのです」

「だろう?」

「いつ出発です?」

「ええっと、ここに提督からの書類が‥‥　えっとポーンペイ先遣隊は以下のように編成する。

隊長：有明誠　海軍大尉（横須賀鎮守府補給係所属）

事務：駆逐艦　電（同）

護衛：航空巡洋艦　鈴谷（呉鎮守府艦娘学校所属）

なお、出発は、えっ‥　この日付明日じゃんっ」

「げっ私もいくのですか‥‥‥　まぁ有明ちゃん1人じゃ可哀想ですし、仕方ないのです」

「てかさ、補給係の引継やってたら今日は、日付かわっても帰れないだろうから、明日出発ってこれ提督の逃がさないぞというメッセージだよな‥」

「そうだと思うのです。しかも、護衛の鈴谷ちゃんなんて艦娘学校からの着任ですよ‥

新人に1人で護衛しろなんて酷すぎるのです」
「まぁ海軍の人員が足らないのはいつもの話だし、命令は絶対だしなぁ」
「有明ちゃんがそういうなら、私は黙って付いて行くのです」
「じゃ、早速だが補給係の業務を総務部に引き継ぐ準備をはじめるか」
「はいなのです」

＊　＊　＊　＊　＊

艦娘には練度別にレベルが設定されている。
また、一定のレベルに達すると『改』となれるのだが、改になるためのレベルは基本的に各艦娘の職種や装備に応じて設定されている。
例えば、特殊な任務を命じられる潜水艦などは高めの数値、５０が改レベルとなっていたりする。
海軍では原則、改になるまでは研修生として艦娘学校で学び、練度を高める事を義務づけている。
つまり、艦娘学校から着任する鈴谷は今回の先遣隊が初の実任務なのだ。

＊　＊　＊　＊　＊

相変わらずゆりかもめの鳴き声が聞こえてくる横須賀鎮守府。日は次の日と変わり、

時刻はもう太陽が昇り切ったころ……

引き継ぎ書類の作成作業を終えて目に隈を作った有明と電がいた。

「やっと‥ おわったのです…」

「あぁ、やっと終わったな… ちょっとひと眠りしよぉ‥」

と有明は机に突っ伏して眠りに就こうとしたが、補給係室入口である簡素なドアの『コンコン』と鳴ったノック音に遮られた。

「どーぞ」

「はっはじめましてっ！呉艦娘学校から着任した鈴谷です。よろしくお願いします！」

最上型三番艦『鈴谷』。アクアマリン色のつやのある髪で茶色いブレザーを身に着ける彼女は、あどけなさが残るが、魅力的な顔だちと明るい性格が光る艦娘だ。

だが、有明達に鈴谷を笑顔で迎えられる余裕は無い。

それどころか、書類作成作業で疲労し過ぎて起きている気力すらない。

結局、有明達は「ヨロシクー」「なのです～」だけ言い残して夢の世界へと旅立った。

鈴谷は着任早々放置プレイとなったのである。

それから3時間後、お昼前。

やっと充電を完了した有明が起動した。彼は応接用のソファーで座るように寝てい

たのだが、いかんせん両肩が重い。右を見るとスヤスヤと寝息を起てている電、左を見るとなんかうなされている鈴谷が仲良く寝ている。

そんな、２人を見ていてほんわかしていた有明だが、時刻を確かめるともう正午。

ポーンペイに出発する予定時間は１５：００なので、あと３時間しかない。

「!?っ。やばい、おいっ起きろ電、鈴谷っやばいぞ」

「あっ有明大尉、おはようございます」

「鈴谷は起きたか・・おいっ電ぁ～おきろぉー」

「あと３時間むにゃむにゃ～」

「あと３時間じゃ遅刻しちゃうよ、マジで起きてください」

その後有明は電をシェイクし、なんとか起動に成功したのであった。

その後

「おっほん。では遅れましたが、ポーンペイ先遣隊結成式をはじめようか」

と有明の一声で、３人だけのプチ結成式が始まった。

「じゃあ、自己挨拶から。鈴谷からお願いできるかな?」

「はいっ。航空巡洋艦鈴谷です。うまれは横須賀、昨日まで呉艦娘学校にいました。先月、改レベルの３５になれたので重巡から航巡に改装されて、発艦訓練とかやってました。今はＬｖ．３６です。よろしくお願いします」

「じゃぁ次は電」
「はいなのです。私は電。特Ⅲ型の末っ子なのです。この世界に艦娘として現れたのは２４年前。いわゆる初期組なのです。今は第1線から退いて事務作業をしてるのです。よろしくなのです」
「じゃ最後は俺だな。俺は有明誠。昨日から大尉になった。好きな物は2次元っ！これからよろしくな」
「・・・」
　突然の２次元ラブ発言に鈴谷はもちろんドン引きしている。そんな様子には目もくれず話を前に進める有明という男だ。
「それから、鈴谷」
「はっはいっ」
「これから、俺に対して敬語禁止」
「えっ禁止ですか？」
「そう、禁止。普通にタメでいいよ、俺、上下関係苦手だからさ。他人の前でだけは敬語にして欲しいけど」
「いやっでも、有明大尉は上司ですし・・」
「じゃぁ上司命令で」

「そんなぁ～」
「鈴谷ちゃん、一応これには訳があるので聞いてあげてほしいのです」
「： わかりました」
「それから、呼び方も有明でいいよ」
　バシッ
「あんまり、調子に乗らないでください。仮にもあなたは隊長、つまり隊の司令官なのですよ」
　と有明はと電からチョップの制裁を受けたが：
「いゃぁでも、階級呼びとか嫌いなんだよねぇ」
「まぁ有明ちゃんの言い分も解らなくはないのです。：： じゃぁ司令官でどうですか？けっこう上司の事をそう呼んでいる艦娘は多いですし」
「まぁ電が言うならそれでいいか。じゃぁ鈴谷と電、今後は敬語禁止。俺のことは司令官と呼ぶように」
「はいっ： じゃなくて： わかったよ司令官」
「了解なのです～」
　こうしてプチ結成式は終了したのだが、出発の時間は刻一刻と迫っている。三人は今後の予定を確認し、鈴谷は工廠に行って装備搭載、電はそれに付き添い、有明はその他

出発準備を行う事となった。

＊　＊　＊　＊　＊

時刻は１５：００前。何とか準備を終えた一行は幕張提督に出発のあいさつをした後、横須賀鎮守府総務部の案内で三人をポーンペイまで輸送する船がいる桟橋まで向かった。

有明は電に問う

「なぁ電、こっちの方の桟橋って嫌な予感しかしないんだけど・・」

「奇遇なのです・・」

鈴谷はそんな二人の会話を耳にして頭に大きな『？』マークを浮かべていたが、すぐに理解するところとなる。

「こちらが、皆さんをポーンペイまでお送りする艦になります」

と総務部の担当者の手の先に現れたソレはーーーー

全長約１２０ｍ、基準排水量１００００トン。コンパクトボディに充実の重武装を施した現時点で海軍唯一のミサイル原子力潜水艦。

『そうりゅう型原子力潜水艦、ネームシップ・そうりゅう』
だった。

1―2出航

深海棲艦が突如として現れた24年前、日本海軍は各艦のレーダー及び偵察衛星から正確にその位置を突き止める事ができていた。
深海棲艦が先制発砲をしたため、海軍は無論正当防衛で応戦するのだが、攻撃があたらない。
いや、レーダー誘導で弾はあたるのだが、そのまま敵の体を透けて貫通する。
ミサイルも、砲弾も。
ならばと機雷を敷設しても起爆しない。
遠隔起爆しても爆風に巻き込まれない。
例え、それが爆心地でも。
しかし、深海棲艦の射撃精度は第二次世界大戦並だが、人間の船は攻撃があたると被害を受ける。
現代の民間船といえども深海棲艦にはかなわない。
次第に増殖・強力化してきた深海棲艦は軍艦ですらかなわなくなってきた。
いくら見つけても、迎撃不能だから当たり前と言えばか当たり前だ。

そんな時、日本に現れたのが『艦娘』だと言われている。
彼女らの兵装は深海棲艦のそれと同じく、第二次世界大戦時のレベルだが迎撃が可能であった。
なぜ、人間の攻撃があたらないのか、なぜ艦娘ならあたるのか。
理由はこの２４年間、定かにはなっていない。

ここにある人物の卒業研究がある。
その要点は以下のとおりだ。

1. 調査の結果、全ての艦娘において第二次世界大戦時に同名の艦が在籍していたが、その魂を引き継いではいない可能性が高い。
2. 1及び聴取内容を分析の結果、パラレルワールド（別世界線）の魂を引き継いでいる可能性が否定できない。
3. 1、2より人間がこの世界のエネルギーで別の世界の物を壊せないが故に、深海棲艦を攻撃できないのではないかと推測できた。
4. しかしながら、3の仮説では深海棲艦も人間側に危害を加えるには不可能であるということになる。

5．　よってこの仮説は正ではない。しかし、因果関係がこれに近いものである可能性は高いと推測する。

海軍大学校四学年　有明誠

＊　＊　＊　＊　＊

そうりゅう型ミサイル原子力潜水艦。

アメリカのオハイオ級を参考に開発された日本初の原子力潜水艦で、原子炉スペースの小型化に成功し、乗員の被爆量も宇宙に行くより少ないとされている。

いくら深海棲艦がいようが、世界の海軍は割とピンピンしており人間も攻めてくるかもしれないので、弾道ミサイルで深海棲艦を超えて攻撃できるように建造された。

主要兵装は８９式魚雷、０５式潜水艦発射弾道ミサイル、シースパロー級対艦ミサイル、魚雷防御装置などで弾道ミサイルは必要最低限数のみ搭載し、対艦重視の設計となった。

建造予定数は８隻だが、ここ近年の相次ぐ深海棲艦の増加と強力化により艦娘関係に予算を回され、建造が遅れている。

遅れに遅れてた１番艦『そうりゅう』の就役は先月だ。

そんな、最新鋭艦がなぜポーンペイ行のタクシーとなったのか、鈴谷は疑問に思う。

その様子を見た有明は

「ん?あぁたぶんな、ポーンペイは飛行場がないから、飛行機は無理。だからといって、わずか3人のために深海棲艦と遭遇する危険を払ってまで水上艦では行きたくない。だから、潜れる潜水艦だけが選択肢として残る。でも、通常動力艦だと物資積むには狭いし、無補給で行って帰ってこれないんだよ。安全地帯を通る為に、遠回りするから」

とサラッと答えてしまった。

「なっなんで、私が疑問に思ってたことわかったのっ??」

「ふふっ有明ちゃんは人間的には馬鹿ですが、これでも海軍大学校主席なのです」

「そうなのっ!?こんなに干された顔してるのに!?」

「えっ、俺干された顔してるの?」

「はいなのです!」

「うっなんだその笑顔、２００％で肯定された気がする‥」

しばらく干された男トークを続けていたら、そうりゅうのハッチから

「おーい、そろそろ乗ってくれ。出航時間だ」

という声が聞こえてきた。

「艦長の苫小牧雄二だ。階級は中佐。噂はかねがね聞いているよ、有明大尉。ポーンペ

イまでよろしく頼む」
「ポーンペイ先遣隊、隊長有明誠大尉です。よろしくお願いします」
苦小牧と有明が艦上で敬礼を交わしたのち、苦小牧の「出港よぉーい」の掛け声でそうりゅうは出港を始め、ポーンペイ先遣隊はゆっくりと横須賀鎮守府を後にした。

＊　＊　＊　＊　＊

艦長の「航海保安用具納め、潜水準備開始」の号令と共に乗員がスッと艦内に入り込み、ハッチが閉められ、乗員は慌ただしく持ち場で作業を進めている。
だが、一方そのころ有明は――
「うっぷ…　気持ち…　悪い」
船酔いをしていた。
「情けないのです、たかだか10knotの穏やかな湾内航行で酔うなんて…」
「鈴谷、さっきはすごい人だと勘違いしてたよ…　それでも海軍軍人？」
「ぐふぅっ、胃の中身が上がってくるっ。俺だってトラベルミンさえ飲めば…　よ…わ…　ない…　んだが、昨日から…　ウッ…　忙しすぎて乗る前に…　飲み忘れた」
結局、有能事務官電ちゃんが有明のトラベルミンと水をすぐに用意したことで、1時

間後には事なきを得て復活していた。

＊　＊　＊　＊　＊

暗くなりはじめた頃から、そうりゅうは潜水航行に移っていた。
ポーンペイ先遣隊の艦娘達は魚雷発射管の下にアウトドア簡易ベッドを設置して睡眠をとっている。
電は５３３ｍｍのひんやりした魚雷発射管を抱き枕にして「魚雷って太いわよねぇ」と寝言を呟いたりしながらスヤスヤと寝ている。
うん、それ君のセリフじゃないよね？
だが、鈴谷は相変わらずうなされていた。
その様子を静かに見ていた有明は気がかりでならなかった。

＊　＊　＊　＊　＊

航行１１日目、そうりゅうは浮上しポーンペイ島を視認した。
「あれが、ポーンペイ島かぁ」

艦上から鈴谷が双眼鏡で初任地を目にして、期待感を持った声を出していた。
「あぁー廃墟ばっか。こりゃコンビニねーな」
同じく艦上から有明が双眼鏡で左遷地を目にして、失望感を持った声を出していた。
マドレニム湾に入ったところで、苫小牧の「停止ぃー」という合図とともに、そうりゅうはゆっくりと進むのを止めた。
それを確認した有明は
「よし鈴谷、偵察をお願いする。四スロ全てに航空機を搭載、準備でき次第発艦せよ。島周辺に敵がいないか調べてくれ」
「えっでも工廠も無いのにどうやって装備換装すればいいの?」
「横須賀から持ってきたんだろう?なら、大丈夫だ。換装ぐらいなら、電がやってくれる」
その後、電がそそくさとやってきてササッと装備を換装してしまった。
そのスピードは鈴谷いわく呉の明石よりも早かったとのこと。
鈴谷は10日以上ぶりに海面に足をつけた。
そして艦載機のパイロット妖精達が敬礼しながら次々と発艦して行った。
「電さんや」
「なんだい、司令官さんや」

「私は目が悪くなったのかねぇ、どうしても発艦していく艦載機が瑞雲１２型（六三四空）に見えてしょうがないんだが・・」
「実際そうなのです」
「だよねッ。横須賀でも貴重な瑞雲１２型（六三四空）なのに、なんで四スロガン済みできるほどここにあるのっ。バレたら、幕張提督カンカンになっちゃうでしょっ」
「鈴谷ちゃんが装備を貰いに工廠に行ったら、ただの瑞雲渡してきたから、私がちょっと物理的にオネガイしたのですよ。そしたら、艦載機熟練度ＭＡＸの瑞雲１２型（六三四空）を予備を含めて６つもくれたのです。あと、晴嵐も３つくれたのです」
「物理的なオネガイってなに!?凄く気になるんだけどっ」
　とそんなこんなしている間に鈴谷の瑞雲から第一報がはいる。
「司令官～、艦載機からの第一報によると島とその周辺１０カイリまで敵影は認めずだって」
「よし、わかった。上陸作業を始めよう」
　物資揚陸作業は空気で膨らますエンジン付きゴムボートで湾に停泊しているそうりゅうから乗員総出で島へ物資を何往復もして運ぶことになる。
「１．２、１．２、１．２」
　狭いハッチから物資を人海戦術で運びだしていく。ただ、それでも２時間はかかるの

だ。
揚陸が始まってから４０分後ーーー
いきなり電が西の空を覗いて真顔になった。
「ん？どうした電。なんか感じたか？」
「最近出撃してないから、勘違いだといいのですけど。鈴谷ちゃん、もう1度北西方向を偵察し直してほしいのです。」
「りょうかいです」

＊　＊　＊　＊　＊

「鈴谷から、各飛行小隊。報告お願い」
「第一小隊異常なしです」
「第二小隊もおなじく」
「第三小隊も異常なし・・・　いや、島影に深海棲艦3隻を発見っ。すみません、こちらも気づかれました。敵、全て駆逐イ級のｆｌａｇｓｈｉｐです‼」
「司令官、どうするの!?」
鈴谷は慌てて有明に判断を仰ぐが、有明は意外にも余裕な顔で

「やっぱりおいでなすったか。大丈夫だ鈴谷、落ち着け」

とだけ言い放った。

1―3会敵

私は駆逐艦電。

この世界で暮らし始めて２４年がたつのです。

艦娘をはじめた頃は艦だったころとは勝手は違うけれどやんとかやっていけたのです。

でもある日、あることに気づいてしまったのです。

『この世界で戦争に勝つには、命を助けることは無理だ』と。

なぜなら、今この世界で起きている戦争は艦娘対深海棲艦。

戦っているうちに『艦娘と深海棲艦は関係があるのではないか』という疑いを持ち、それが確信へとどんどん変わる。

そしてある時、それが現実として前に現れたのです。

姉、『暁』が雷撃による轟沈。

その後現れた敵集団の１隻、空母ヲ級がその暁でした。

姿や声は変われど１５年以上も付き添ってきたから、感覚でわかったのです。

つまり、艦娘を沈めたら深海棲艦になる。その逆もまた然り。

深海棲艦‥ 敵を倒せば艦娘になる。
敵を倒さなければ、艦娘がやられて深海棲艦になってしまう。
深海棲艦を助けてしまったら、艦娘に戻らない。
だから、敵を倒さなければならないのです。
私はただ、命を助けたかっただけなのに‥
それから、自分の心を塞ぐ日々がつづいたのです。
その日々が一変したのは当時、防衛研究所の研究員だった有明少尉との出会いだったのです。

＊　＊　＊　＊　＊

電の『感』が疼き、鈴谷が周囲を再航空偵察をした結果、近くに駆逐イ級3隻が発見された。
「司令官、どうするの!?」
「‥ やっぱりおいでなすったか。大丈夫だ鈴谷、落ち着け」
「でもっ」
「それより、偵察詳細を報告するのです」
「はいっ。えっと‥ 私たちが今いる、ポーンペイ島南東のマドレニム湾の正反対、ポー

ンペイ島北西のダウアーック諸島南側に駆逐艦3を確認。駆逐艦のため、航空攻撃の恐れはないよ」
「でも、護衛である鈴谷を敵が突破したら、すぐに潜ることのできないそうりゅうはやられてしまう。そうだな?」
「そうなのです」
「やれるか?鈴谷」
「うううん、やれる。そのための、護衛だからね!」
「よしわかった。鈴谷、航空機収容して装備を主砲、副砲、魚雷、晴嵐に換装」
「りょかい、電ちゃんよろしくお願いします」
「はいなのです」
　そこにそうりゅう艦長の苫小牧が
「その様子だと、俺達は揚陸作業を続けてていいんだな?」
　と確信したように有明に聞いてきた。
　もちろん、有明の返事は
「大丈夫です」
　だった。

＊　＊　＊　＊　＊

「準備完了したのです」
「おっ完了したか・・・　電??君も装備つけてるけど・・・　行くの?」
「念のために、鈴谷ちゃんに付いていくことにしたのです。４年ぶりに潮に当たってきます」
「そうか。無理はするなよ・・　２人とも」
「「はい」」

「発、ポーンペイ先遣隊第一艦隊旗艦鈴谷。宛、司令官。無線の感度はどう?」
「こちら、司令。感度良好。出撃せよ」
「了解っ、鈴谷にお任せー!」
「電の本気を見るのです!」

＊　＊　＊　＊　＊

「敵視認、駆逐３」

しばらく海原を航行していたら、電がいきなり裸眼で敵を見つけた。
だが、鈴谷は双眼鏡を使ってもわからない。
「まだ、双方射程圏外だから、落ち着いて探すのです。一番近いのが方位２８６、単横陣で航行中。あくび掻いてるから、きっと瑞雲見失って暇してるのです」
そして、鈴谷も方位２８６を双眼鏡でがんばって覗くこと3分
「あー、私も視認しました～。よくあんな小さいのわかったね」
「まぁ長年の勘なのです。鈴谷ちゃん、航空攻撃用意してください」
「晴嵐発艦しまーす」
ブルブルブルと音を立てながら飛行科の妖精たちによって6機の晴嵐がテンポよく飛び立つ。
そして、みるみるうちに小さくなってゆき、あっという間に攻撃開始の連絡が入った。
「飛行小隊より、母艦鈴谷。駆逐イ級ｆｌａｇｓｈｉｐを一隻轟沈、もう一隻を小破。爆弾を打ち尽くしたので帰投します」
「了解、お疲れ様。鈴谷はこれから残りを殲滅に向かうから、飛行小隊はそうりゅうの近くに着水後待機して」
「了解!」
「こちら、鈴谷。司令応答できますか?」

「ほーい、こちら司令」
「敵に航空攻撃をしたよ。攻撃効果は一隻轟沈、一隻小破。これから、私たちは残りを殲滅に向かうから、晴嵐をそっちに預けるねー」
「わかった。くれぐれも無理は無いように」
「はーい」
「じゃあ次は砲撃戦なのです。相手は駆逐、鈴谷ちゃんは航巡ですから、相手の射程圏外からぶっぱなしちゃいましょう」
「わっかりました」
「目標、小破中の敵駆逐艦α2、方位292、距離2万7000ヤード」
電が双眼鏡を覗き敵影を確認後、鈴谷に指示をする。
鈴谷もそれに応えるように主砲をキィーッと音を鳴らしながら、照準をあわせ・・・・
電の「撃ちぃー方始め」の合図とともに主砲を発射した。
スドォーンという轟音とともに1発が円弧を書いて敵へ向かう。
そして、吸い込まれる様に敵周辺へと落下した。
「弾チャーク・・ 今っ！。至近弾なのです」
「どんどんいくよー！」
ドンドンドンとリズムよく弾が発射される。

次々と発射された砲弾は見事敵に命中し、ダメージを追わせていった。
「α2撃沈なのです！次、α3。方位295、距離2万ヤード、目標反転中、逃げる方向なのです。鈴谷ちゃん最大戦速で追いますよ」
「最大戦速了解っ！方位295発射準備よし」
「撃ちぃー方始め」
「それっ」

カチ

「ん？」

カチカチカチカチカチカチカチカチ

鈴谷の主砲は砲雷科の妖精達が弾を込め、鈴谷が主砲に付けられたトリガーのようなボタンを押すことによって発射される。
つまり：

主砲から妖精達が出てきて鈴谷に知らせた
「た　ま　ぎ　れ　で　す　！」
「うん、だよね（泣）」
「攻撃を魚雷に変更するのです！」
「あー、魚雷かぁ。私、訓練での命中率がちょっと悪くて・・・・」
「ちょっとってどれ位？」
「そのぉー・・・・　さっ３％くらい・・」
「それ・・・・　四捨五入したらゼロなのです」
「ごめんなさい・・」
「まぁ、引っ越しが終わって落ち着いたら、撃ち方教えてあげるのです」
「本当っ～！ありがとう、電ちゃん！」
「じゃあ、今回は特別に残り一体は私が倒すのです」
「わかりました。あっ目標方位っていります？」
鈴谷は観測射撃支援の必要の有無を聞くが、普通は質問せずにすぐに支援に入る。
ではなぜ、あえて質問をしたのか――――
それは、新人の鈴谷でも邪魔になるかもと察せるほど電の戦闘力が高いから。
電は静かに首を横に振った。

そして、１２．７ｃｍ連装砲Ｂ型改二を静かに構えて目をつぶることほんの１０秒。
ボンっ
１発だけ発射した。
砲弾は空気抵抗に逆らい、勢いよく敵方向へ飛んでゆく。
そして、敵の駆逐イ級の兵器が格納されている口の中へと吸い込まれていった。
ドオンンンン
まだ、敵との距離はかなりあるのに地響きのような振動が鈴谷たちに伝わる。
駆逐イ級が内部から一瞬で分解するように、爆発した‥と思う。
いくら、艦娘でも着弾から分解までのプロセスが早すぎてよくわからなかった。
「すっすごい‥」
「腕が鈍ってなくて良かったのです～」

＊　＊　＊　＊　＊

有明の手元のパソコンで起動している艦隊遠隔サーポートシステム（ＦＲＳ）。
その表示画面には『完全勝利　　Ｓ』と表示された。
「ふう、終わったか。完全勝利なら、こちらは被害を受けてないな。良かった」

「おっ終わったか？」
　ここはそうりゅうのコックピット。
　そうりゅう搭載の水上レーダーＺＰＳからは敵影が消えていた。
「ええ、ありがとうございました。苦小牧中佐」
「それはこっちのセリフだ」
　お互いに安堵していたら、艦長の無線機に連絡が入る。
「艦長、物資揚陸作業完了しました」
「了解した。有明大尉、物資揚陸作業が終わったようだよ」
「そうですか、ではあとはあの子達の帰投をまつだけですね」
「司令、応答できますか？鈴谷だよ」
「はーい」
「敵艦隊の全滅を確認したので現時点をもって、作戦を終了してＲＴＢします」
「了解、帰り道気おつけろよ」
「はーい」
　それから、しばらくして鈴谷と電の第一艦隊は帰還。
　艤装を外してそうりゅうとのお別れの場面。
「じぁ有明大尉、電君、鈴谷君。私たちはそろそろ失礼するよ」

「送り届けていただいてありがとうなのです」
「任務が問題なく遂行できることを願っているよ。迎えは2週間後でいいんだよな？」
「はい。よろしくお願いします」
「了解した。出航ヨォーイ」
ププププーププププープププッププー
ラッパと共にそうりゅうの乗員は持ち場へつき、そのままゆっくりと湾を出ていく。
そして、そうりゅうが見えなくなったころには、時刻はもう夕日が見える時間となっていた。
「私は揚陸物資の確認をするのです」
「あっ手伝います！」
事務担当の電が早速仕事をはじめた。
鈴谷も着任の時のガチガチ感はなくなり、自然と電を手伝うようになっている。
いいことだと有明が2人の後ろ姿を眺めていた矢先、電いきなり震えだして発注した物資一覧をすごい勢いで確認しはじめた。
有明も鈴谷も頭の中が『？』だったがーーー
電の一言で事の重大さを知る。
「どうした、電？」

「司令、鈴谷ちゃん。住むところがないのです！」

1―4生活

ミクロネシア連邦ポーンペイ島。
ポンペイ島とも呼ばれ、ミクロネシア連邦の中核をになっていた。
島はほぼ円形の直径約２４ｋｍで東側に湾を持ち、一年中暑い。
歴史的な背景から見れば、かつて大日本帝国が国際連盟から委任統治を任されていて、あの戦争でも海軍・陸軍がともに駐留していた。
そして、終戦とともに独立。
安泰の日々が続くとポーンペイの人々は、信じて疑わなかった。
だが、深海棲艦が現れてから半年もしない頃。
多くの生活必需品を輸入に頼っていたポーンペイはその命綱を喪失。
ミクロネシア連邦政府は国家非常事態宣言を発令し、全国民の避難を余儀なくされた。
つまり、今のポーンペイには人口はゼロ。
かつての街も荒れ果てている。
そんなポーンペイで暮らす上で最も警戒しなければならないこと。

それは深海棲艦の接近ではない。
もちろんアニメが見れないことでも、携帯の電波が繋がらないことでもない。
とりわけ赤道付近で感染しやすい『マラリア』だ。
かつて?連合艦隊司令長官山本五十六もトラック諸島で言った。
「おまえら、早く部屋に入れ。マラリアになるぞ!」
と。映画で。
そんなこんなで対マラリア除染をしていない無人の島ポーンペイでは壁と屋根がある部屋で暮らさないと命取りとなるのだ。

＊　＊　＊　＊　＊

深海棲艦を無事撃沈させ、揚陸物資を確認していた電のセリフで有明と鈴谷が凍りつく。
「はわわっ、司令、鈴谷ちゃん。大変なのです。住むところが無いのです!」
その衝撃の言葉に一同が沈黙する‥
「・・・・ぱーるん?」
有明が現実を受け入れられていない。

「せい、あげーん」
鈴谷もだった。
「ううう申し訳ないのですーー。出発の日は引き継ぎ作業が忙しすぎて『超簡単設営！六畳間のインスタントプレハブ小屋キット』を頼み忘れたのです：」
その事実を伝えたのを最後に一気にネガティブスイッチがＯＮになった電は下を向きながら「ハハハハハハ、ワタシ、ヤッチャタ、ノデス、ハハハ」と壊れている。
「やばいぞもう夕日が見えてきたっ」
有明が日が落ちるタイムリミットを気にする。
「どっどうするの？司令っ。辞令に添付されてた資料にはマラリア要注意ってかいてあったよ！」
鈴谷もあたふた状態だ。
気味の悪い笑い声を一定のリズムで発する電。
頭を抱えてしゃがみ込む鈴谷。
そうだ！ヤフー知恵袋に聞こうと電波のつながらないスマホを一生懸命に操作する有明。
ここにあたふた三人組が結成された。

あたふたしてどうしようもない三人組のなかで1番早く正気に戻ったのは
ーーー有明だった。
有明はスマホの壁紙。――――ルームメイトと共に写っている写真を見て我に返った。
彼のルームメイトがいつも有明にこう話す。
「あなたは、いい方向に人を導く才能があるわ！この私が認めてあげる！だから、他人にどんな事をされようが、言われようが、どんな状況に陥ようが。誠はあなたを信じてくれる人たちの為に一生懸命考えなさい！実行しなさい！頑張る誠のためになら、私はなんでも手伝うから。支えるから。私は逃げてしまったけれど、あなたにはできる。だから・・・お願いね！」
有明の生きる理由として、このルームメイト。いや、『親友』の存在は大きい。
そんな親友の言葉はいつしか彼の行動原理となっていた。
だから、彼は動く。機械のように。言葉に従って。
「ーー鈴谷、さっきの偵察では陸は確認してないよな？」
「うん、そうだけど・・」
「じゃあ、ここから日の入りする前に歩いて行ける場所でなにか無いか探してくれ。できれば建物がいいが、この際洞窟でもなんでもいい。日が落ちると艦載機の離着陸ができなくなるから、急いで」

「え?うん、わかった。艦載機のみんな、お願い!」
瑞雲12型（六三四空）達が猛スピードで発艦していく。
飛行科の妖精にとって。いや、全ての鈴谷乗組妖精にとって今回の件は一大事だ。
基本的に乗り込んでいる艦娘が弱ると、その艦娘のエネルギーを活動資本としている妖精達の力も弱まってしまう。
下手すれば消えてしまう妖精も出てくる。
艦娘は弱ったら入渠すればいいのだが、ここにはそれができる設備がない。
設備がある所に簡単に移動できるわけでもないので、艦娘もマラリアに感染したら人間と同じくらいに一大事になってしまう。
それを理解している妖精達は目に血柱を建てて、血眼となって偵察をはじめた。
離陸して少し経つと、妖精から鈴谷に連絡が入った。
鈴谷がその内容を懸命に聞き取り、有明に伝える。
「司令っ!北西に18kmいった所に建物があるそうです!」
「ダメだ。18kmじゃ徒歩で3、4時間かかっちまう。それに、車が無いのにそこまで揚陸物資を持ってくのは不可能だ」
クソッ、他に建物は無いのか。と有明が悔しがりったその時ーー
「ウミーニ、オフネーヲ、ウカバセーテー」

童謡、海を電が歌いはじめた。もう色々と精神的にイッテしまった電の歌う海には音階が存在していない。

もうこれは『深海棲艦電』状態だった。

「イッーテミタイナーヨソノー：ク：ニー　：　ンん？あれっ？　　有明ちゃん!!そこの双眼鏡取ってください！」

「ん？あっこれか？」

「ありがとうなのです」

電は海を背にして陸のある方向へ双眼鏡を向ける。

「あれは!?：　鈴谷ちゃん！艦載機へ連絡！方位２４０方向、距離１．２ｋｍ」

「はっはい」

方位２４０方向、海岸から距離１．２ｋｍにあったもの。

それは黄色くて四角い構造物。

３人が目を星にして駆け寄った。

側面には『Ｍｉｃｒｏｎｅｓｉａ　ａｕｔｏｂ・ｓ　ミクロネシアバス』とスペイン語・日本語で書かれている。

文字通り、路線バスが鎮座していたのだ。

「よく見つけたな電！」

「うちの艦載機が見つけられなかったのに・・すごいね・・」
テンションが上がる有明と俄然とする鈴谷。
その理由には艦娘の『特徴』が関係してくる。
艦娘は自分の意思で艤装を一部、もしくは全て展開できるのだが、展開しない状態ではただの女の子となんら変わりがない。
つまり、あんな木々が生い茂った中にあったほんの一部が見えるか見えないかぐらいのバスを見つけるのは、艤装を展開してる電ならともかく、生身の電が見つけるのは普通なら奇跡のレベルなのだ。
普通なら。

「海から近いし、バスも古い割には損傷が少ないし、窓ガラスもこれならテープでなんとかなるレベルだな」
「よかったのです～」
「艦載機達、戻しますね」
「そうだな。妖精達にも協力してもらって荷物を海岸から運ぶぞ！」
「「はい！」」
こうして3人＋妖精達は枕を高くして寝れるのだった。

＊　＊　＊　＊　＊

そんなこんなで何不自由無く――とはいわないが電による『住む所』以外の物資の発注は完璧で、荒れ果てた&なかなか（深海棲艦のせいで）人間が簡単に近づけない無人島であるにもかかわらず、かなりいい生活を送りはじめて早三日。

鈴谷は湾周辺の海と陸をを艤装・妖精をフル活動して実地調査。

有明も元研究者の知識を生かして地質・水質・地形・地盤・環境など調査して、来月には物資揚陸用の小型艇が接岸できるぐらいには深海棲艦に破壊された港を復元する作業を始める予定だ。

全てが順調に事を運んでいると思っていた矢先に事件が起きた。

書類事務・雑務担当の電は物資のひとつ、日本陸海空軍御用達『野外給湯器改４３』で風呂の湯を沸かしていた。

風呂は小さめの四角い貨物コンテナにやけど防止のすのこを引いたもの。これも電ちゃん特製だ。

今日は鈴谷がウエットスーツを着て湾の海底調査をするので砂だらけに、有明が作業着を着て森で生態系調査に出ているので泥だらけになって帰ってくる予定なので、電は

いつもよりもお湯を多めに用意するべく奮闘していた。
こうやって甲斐甲斐しく業務面以外でも、電はみんなの身の回りの世話を率先してこなしている。
だから、補給係時代に有明が「電ママ」って呼んでみたら「は？あなたのママだったら私は何歳になってしまうのです？」とマジレスされたそうな。
そんなこともあったなと回想しながら、給湯器を見守っていた電だがなんか違和感を感じ始めた。
それは見事に的中し、だんだんドンドカドンドカと音を立て始めた給湯器はついに『ボンッ』と鳴ってその活動を休止してしまう。
「たっだいま～」
給湯器が故障した絶妙なタイミングで鈴谷が帰ってきてしまった。
予定通り砂だらけだ。
「俺も今帰ったよー」
有明も予定通り泥だらけだ。
半泣きの電はカクカクシカジカと給湯器が壊れてしまった事について説明をした。
「なるほど、カクカクシカジカだったのか」
「そうなのです・・」

「それでお風呂1杯分はたまったけどシャワーの分までは確保できなかったと」
「うーむ、弱ったな。片方がシャワーを浴びずに湯船につかれば、湯が泥まみれや砂まみれになってしまうな」
「そうなのです」
「修理はできないのか？」
「野外給湯器シリーズは簡単な機構で修理がしやすいように設計されているので、可能だと思うのです。でも、すぐには終わらないし、日も落ちているので修理できるのは早くても明日。つまり、今すぐにはどうにもならないのです」
「そうか、なら仕方ない。俺は砂風呂で構わんから、鈴谷が先に入ってくれ」
そこまで一言も喋ってない鈴谷が自分に話しかけられはっとする。
それでもモジモジしていたが、顔を真っ赤にして少し俯かせながら：
「しっ司令なら：一緒におっお風呂にはいってもいいよ？」
と爆弾を投下した。
一瞬の静寂。
「～～～～～ッ／／／」
と更に顔の温度が上昇する鈴谷。
「え、えっと：：はい？」

有明のＣＰＵも処理落ちしたようだ。
「いやっだからね！私だけ綺麗なお風呂貰うわけにいかないしさ？それに、司令のことを知ってからまだ日は浅いけれど、変な性格でも悪い人じゃないことは分かったし！もっもちろん、タオル巻いて背中合わせでお互いそっぽ向いて入るならって話だけど」
「まぁ鈴谷がそう言うなら・・」
「うーん、それでいいのです？いや、こっちとしては助かるのでそれでいいなら準備してくるのです・・」

＊　＊　＊　＊　＊

そして今、背中を合わせて鈴谷と有明は背を向けて体育座りで湯に使っている。
「丁度いいお湯だね？司令」
「そうだな」
「・・・」
中々会話が弾まない。どちらもフリーズ寸前だ。
だが、有明のこんな一言で場の空気が一変した。
「なぁ、鈴谷。なんか悩みがあるのか？」

「!?」
「俺はなちょっと特殊な艦娘たちを相手にしていた時期があるんだ。その経験から言わせてもらうと、鈴谷は何かに悩んでいるように感じてならないんだ」
「・・・うん、なくはない・・・ というかあるよ。悩み」
「でも君の様子を見ていると、それについて触れてほしくないのかな?」
「うん、正解。なんでもお見通しだね」
「そうでもないさ。探ってみたが、なんの悩みかまでは分からなかった。そうゆう意味では司令としてまだまだ経験不足だよ・・ でも話せる時が来たら話してくれないか? 俺は人間としても、艦娘の司令としても半人前だが役に立ちたい。君達艦娘をもっと理解したいんだ」
「司令は変な人だね。普通いないよ? 艦娘の内面まで気にする人。でも、だからこそ信頼できるかもしれない。この悩みはね、別に言いたくないんじゃ無くて、言う勇気が出ないの。気持ちの整理がつかないの」
「そうか」
「だから、気持ちの整理がついたら打ち明けるね。私の悩みを」
「あぁ。いつでもかかって来い」
「ありがと。のぼせてきちゃった。先に上がるね!」

そう言いながら鈴谷は足早に浴槽からでようとする。
きっと照れていたんだろう。だが、それが起因して浴槽から出る際に足を滑らしてしまう。
「キャー！」
「危ない!!」
背を向けていた有明が脊髄反射で瞬時にふりむいて背中向きに倒れてくる鈴谷を受け止める。
いわゆる『お姫様抱っこ』の状態で何とか鈴谷を受け止めた。
が、鈴谷をガードしていたただ一枚のバスタオルの結び目が解けてｖ＝ｇｔ、自由落下の速度で湯船へと降下していく。
そして生まれたままの姿の鈴谷が有明の眼下に広がった
「えっと釈明をさせてほし」
「キャーー」
その叫び声は森の動物たちを追いやるほどの大きさだったそうだ。

1―5上司

「ナニカイイノコシタイコトハアルデス？」
鈴谷の絶叫のあと、すぐに憲兵電が駆けつけ有明は即御用となった。
そして電による裁判が開廷して、最初に言い渡された言葉がこれである。
「開廷の言葉が遺言を聞いている件について説明願いたい」
「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｌａｗナノデス」
「うぉー三権分立してねぇー」
裁判構図はこうだ。
被告人の有明誠。罪状わいせつ行為。
裁判長兼憲兵兼検察兼立法府兼行政（法務省・刑執行）の駆逐艦電。
先ほど女の子の辱めについは『女の敵』として死刑に処すると立法府の電が制定し、検察の電は死刑を求刑している。
そして、被害者兼あまりにも有明が可哀そうだったので弁護人となったのが航巡鈴谷。
「あのぉーさっきのは私が足滑ったのがわるかったんで無罪ってことには・・」

「ならないのです」
もはや被害者の意思すらこの裁判には反映されないようだ。
鈴谷も何を言ったらよくわからなくなり、訪れた静寂。
それを打ち破るように有明が意を決っして発言を求めた。
「電裁判長っ！」
「発言を許可するのです」
「・・・この場をお借りして謝罪します！事故とはいえ、申し訳ありませんでしたっ」
有明は鈴谷の前で土下座をした。
いきなりの土下座に鈴谷は困惑する。
しかし
「有明ちゃーん？ちょっと頭が高いのではないです？土下座はもう少し地面に頭を擦り付けるものだと思うのです～」
と電は容赦無い。
「はっはっ電様～」
と電に言われた通りに地面に頭を擦りつける有明。
もはや被害者なのに鈴谷は2人の空気に付いていけず、「あうぅ・・」と置いてきぼりになっていた。

＊　＊　＊　＊　＊

暦上では『弥生』に突入して二週間ほどが経過した。

「ちゅんちゅんちゅん」と海の鳥・ゆりかもめがさえずりだしたある日の朝。

ポーンペン先遣隊仮官舎兼仮庁舎のバスに設置されていたＦＡＸも「ピーヒャラヒャラヒャラ、ピー」とさえずっていた。

電が透かさず印刷された紙をＦＡＸからむしり取り、通信暗号の解読を始める。

情報化が進んだ現代においても、ポーンペイ島では予算と大人の都合でネットワーク機器が『パナソニック製家庭用ファクシミリ付電話機』のみなので重要連絡は暗号文化されたＦＡＸで送られてくるのだ。

「えーっと何々なのです？　ツウタツ・ブガイヒ・・・　いや、私たち以外誰も住んでいない無人島に部外秘とか言われても困るのです。漏らす所が無いのです」

「ふぁ～、おはよう、電。横須賀鎮守府からか？」

時刻は午前七時。有明が起床して電にＦＡＸの内容を確認する。

「おはようなのです。今、解読中なのです」

「そういえば、この島に来てもう二週間近くなるな～。暖かいし、深海棲艦の襲撃は最初の１回だけだったからさ、環境的には文句ないんだけど・・・　ネットないからネトゲできないし、ＴＶも見れないし、持ってきた機材でできる仕事はほぼ全てやりきっちゃたか

らさ、日本に帰りてーな」
「‥‥　うん、これで良しなのです。司令官、復号できたのです。どうやら、明後日お迎えがくるそうなのです」
「おっそうか。どれどれ」
通達（部外秘）
発：横須賀鎮守府、宛：ポーンペイ島先遣隊々長有明海軍大尉
明後日ヒトマル・マルマルに貴隊撤収のため、潜水艦そうりゅうを派遣する。
調査活動を終了し貴官は隊員とともに撤収して、そうりゅうにてグアム分基地へ出頭せよ。
以上。
「‥‥　日本に帰れねーのかよ！」
「ドンマイなのです～」
＊　＊　＊　＊　＊
そんなこんなで有明達ポーンペイ島先遣隊一行は苦小牧率いるそうりゅうでグアムへと向かった。
潜水艦は基本船酔いしないはずなのに、道中では有明が〝また〟船酔いしたらしい。
現地に到着し、そうりゅうを離艦した有明と苦小牧は海辺でお互いに敬礼を交わしな

がら別れの挨拶をしていた。
「わが隊に協力いただきありがとうございました。苦小牧中佐」
「いや、これも任務だ。気にするな、有明大尉。それに、君は噂以上に面白かったよ。特に海軍々人なのに船酔いする所なんかね。次回もポーンペイ島まで送ってやる・・と言いたいところなんだが・・・・ 来月から二番艦のうんりゅうが就役する関係で、本艦も本格的な運用が始まる。忙しくなりそうなんで、どうやらそれは無理そうだ」
「そうですか。苦小牧中佐とお会いできないのは残念ですが、任務頑張ってください。武運長久をお祈りします」
「こちらこそ、貴官の任務遂行を陰ながら応援する」
バシッと互いに敬礼し、先遣隊一行はそうりゅうを背に桟橋から庁舎に向かう。
この時みたいにたまに見せる、軍人らしい有明の姿が鈴谷には少し輝いて見えた。

＊　＊　＊　＊　＊

アメリカ合衆国グアム島。
１９４４年の大東亜戦争終結まで日本軍の占領下にあったが、日米講和条約締結により彩帆島（サイパン）の東京都編入を条件にアメリカへと返還された。
それからは『リゾート地』として島の美しさを売りに観光業で栄えていたが、二十四年前の深海棲艦襲撃によりグアム政府は国家非常事態を宣言。

全島民に対し島外避難の指示したのでグアムは一時無人島となった。
その後日本の艦娘によって周辺海域は万全とは言えないが安定化され、現在はアメリカ海軍グアム基地に日本海軍グアム分基地が設置されて、対深海棲艦戦の現状整備されている最前線基地となっている。

＊　＊　＊　＊　＊

「お待ちしていました。有明大尉、電さん、鈴谷さん」
有明たちを出迎えに来た艦娘を見て、電は驚く。
「あっ・・　あなたはあの吹雪ちゃんではないのです？」
「はいっ!!そうです。お久しぶりです、電ちゃん」
「電、知り合いかい？」
「はいなのです。この子は私と同じ『初期組』の吹雪ちゃんです！まぁ正確には吹雪改二ちゃんなのです」
「有明大尉、鈴谷ちゃん。初めまして。特型駆逐艦の1番艦、吹雪です。よろしくお願いします！」
「ポーンペイ先遣隊々長の有明だ。君の事は書類では見かけたことがあるのだが・・・　会うのは初めてだな。よろしく頼む」
「同じくポーンペイ先遣隊、旗艦の鈴谷だよ。よろしくね」

「あれっ?でも、吹雪ちゃんは軍令部勤務じゃなかったのです?」
「電ちゃん･･･ それ大昔の言い方だよ。今は海軍幕僚監部っ。たしかに海幕勤務だったんだけど、こっちが人手不足になってて、秘書官補助として期間限定で派遣されてるの」
「そうだったのですか～。何はともあれ、久しぶりに吹雪ちゃんに会えて電、嬉しいのです!」
「私も～。あとで、時間がある時に間宮に行ってお話しよね～」
「おっここには間宮があるのか!」
「はいっ先月新設されたばかりの店舗なんで、内装もオシャレでいい雰囲気ですよ」
「そうか～、ぜひ後で行ってみよう。鈴谷も一緒に行くか?今日は奢るぞ」
有明は『間宮』というワードを耳にして少しハイテンションになっていた。
なぜなら、ここ一か月近く無人島か、海の下の潜水艦だったので和菓子にあまりありついていないどころか、人が食べ物を作ってくれて、ゆっくり雑談ができる『外食店』に足を運んでなかったからだ。
「えっいいの?うん、行く!」
「では、先に仕事を済ませなければいけませんね。皆さんの今後のスケジュールについて説明します」
そう言いながら、吹雪はクリップボードに挟んである書類を読み上げる。

「まず、有明大尉ですが分基地司令がお呼びです。この後、私と一緒に司令室までお越しください」
「了解した」
「電ちゃんと鈴谷ちゃんは最初に入渠・点検を行い、庁舎に作業場所を用意したので、そこでポーンペイの報告書を完成させて防衛省に送信してください」
「はーい」「了解なのです」
「今晩はこの基地の宿泊所にそれぞれ個室を用意したのでそこに泊まってもらって、明日の朝に厚木行のC―1が出るのでそれに搭乗してもらう流れになります。何か不明点ありますか?」
「いや、大丈夫だ」
「それでは、有明大尉。司令室へ向かいましょう」
「わかった。じゃあ、電、鈴谷。また後でな。報告書よろしく頼む」
「わかったのです」「また後でねー」

＊　＊　＊　＊　＊

有明は吹雪の案内で司令室まで向かい、吹雪は司令室の扉をノックする。
トントン。
「司令、吹雪です。有明大尉をお連れしました」

「ごくろう、通せ」
「はい」
「有明大尉入ります」
有明が入室すると、グアム分基地司令は執務机の椅子に座り、入り口とは反対側の海を眺めていたが、それをやめてゆっくり入口側に振り替える。
「久しぶりだな、有明主席。いや、今は有明大尉だったな」
「貴様はッ： いや、失礼した。貴官は清水神人次席： だな？」
「そうだ。今は次席ではなく、海軍中佐、清水神人グアム分基地司令だがな」
清水神人――――有明と海軍大学校の同期で、有明を嫌う人間の一人。
そんな彼が有明に突き付けた言葉は
「これからはお前の上司になる。よろしく」
だった。

第1．5章　1章のまとめ

1．5―1設定まとめ1

〈人物編〉

名前：有明　誠（ありあけ　まこと）

所属：日本海軍横須賀鎮守府補給係々長（海軍中尉）→日本海軍横須賀鎮守府直轄ポーンペイ先遣隊々長（海軍大尉）

本作の主人公で軍事研究職をしていた経験を持つ。ある時、某軽巡から感染しＯＴＡＫＵとなる。実家は大湊にあり兄弟に弟一人、妹二人を持つ。海軍大学校主席卒業。

名前：幕張　将司（まくはり　まさし）

所属：日本海軍横須賀鎮守府長官（海軍中将）

割かしエリート街道を歩いて来たおっさん。肥満気味。艦長時代に生活習慣病で地上転換させられた経験を持つ。海軍大学校の先輩として、有明のような軍内の縦割り社会に従順ではない者が、大嫌い。

名前：駆逐艦　電改　（Ｌｖ．　９９）
所属：日本海軍横須賀鎮守府補給係（事務）→日本海軍横須賀鎮守府直轄ポーンペイ先遣隊（事務）
初期組と呼ばれる、最初に現れた五人の艦娘のうちの一人。何人もの提督から『ケッコンカッコカリ』を申込まれたが全て拒否した経験を持つ。予備艦として事務に携わっている。艦娘船籍は横須賀。趣味は深海棲艦を倒すこと。明らかに他の電と性格が違う。

名前：航空巡洋艦　鈴谷改　（Ｌｖ．　３６）
所属：日本海軍呉艦娘学校（研修生）→日本海軍横須賀鎮守府直轄ポーンペイ先遣隊（護衛）
雷撃が苦手。本作のメインヒロインのはずなのに放置プレイになったり、電のほうが存在感あったりとかわいそうな娘。艦娘船籍は横須賀。

名前：苦小牧　雄二　（とまこまい　ゆうじ）
所属：潜水艦そうりゅう艦長（海軍中佐）
初対面から有明に友好的な人間。潜水艦まではスーツで出勤。

名前：駆逐艦　暁改
電の姉。轟沈し、空母ヲ級ｆｌａｇｓｈｉｐになってしまった。
この出来事から電は艦娘が沈むと深海棲艦になってしまう事実を知る。

名前：不明
有明のルームメイト兼親友。

名前：駆逐艦　吹雪改二　（Ｌｖ．　１５５）
所属：日本海軍幕僚監部
ケッコン済み。吹雪も初期組の一人で電とは電ちゃん吹雪ちゃんと呼び合う仲。

名前：清水　神人　（しみず　かみひと）
所属：日本海軍グアム分基地司令（海軍中佐）
有明と海軍大学校で同期。次席卒業。

〈単語編〉

「補給係」
　正式名称は日本海軍横須賀鎮守府総務部補給係。艦娘や艦船の補給関係の数字とみらめっこするのが仕事。武器はＥｘｃｅｌ。有明と電で構成されていたが、ポーンペイ先遣隊創設により解体された。

「横須賀鎮守府」
　日本の領海を四分割して管轄し、守るための海軍機関の一つ。他に大湊、呉、佐世保がある。

「日本海軍の階級」
　大東亜戦争時代までは兵科ごとで階級章が違ったり、叩き上げとエリートで呼び方が違ったりしたが、今は共通。下から二等海兵、一等海兵、海兵長、三等海曹、二等海曹、一等海曹、海曹長、海軍准尉、海軍少尉、海軍中尉、海軍大尉、海軍少佐、海軍中佐、海軍大佐、海軍准将、海軍少将、海軍中将、海軍大将の１８階級。

「日本海軍」
　新憲法公布に伴い、大日本帝国海軍が組織改革された後の組織。文民統制を取り入

れ、海軍は陸軍とともに防衛省・防衛大臣の管轄下に置かれることになった。任務は日本防衛、災害時等の有事の際の支援、国際交流とここ二十数年は対深海棲艦戦。

「防衛省」

日本陸海空軍と海上保安庁の親組織。内閣総理大臣を最高司令官とし、防衛大臣を参謀として構成されている。

軍の活動地域は日本全土と同盟国の領内。各同盟国には日本軍基地が設置されており、アジア地域における国防の中核をになっている。各軍の構成人数（予備役除く）は陸軍３０万人、海軍１０．５万人、空軍８万人、海上保安庁２．５万人。

「日本」

正確な名前は日本国（Ｊａｐａｎ）。しかし、しばしば日本連邦（Ｕｎｉｔｅｄ　Ｓｔａｔｅｓ　ｏｆ　Ｊａｐａｎ）と呼ばれる事もある。先の大戦の反省と大東亜戦争でアメリカとの講和条件として突きつけられた憲法改正により、天皇の権限を限定的とした立憲民主制国家。国連安全保障理事会常任理事国。日本の領土自体は北は南樺太、東は択捉、南は北マリアナ、西は与那国までだが、同盟国（属国）に台湾（中華民国）、朝鮮（朝鮮民国）、ベトナム、インドネシア、フィリピン、インド、マレーシア、タイ、ミャ

ンマーがあり、各国で独立した自治を行いながらもＥＵのようにパスポートなしの往来ができたり通貨は日本円で共通している。防衛面では自国の軍隊と駐留日本軍の二段重ねで対応する仕組みになっている。

「深海棲艦」

２４年前に突如として現れた得体の知れない物体。それが生命かも怪しいので生命体とすら呼ぶこともできない。体は黒く、船のように水面を進み人間の乗る船を見つけたら攻撃してくる危険な存在。レーダーで見つけることはできるが、人間の攻撃は効果がない。世界のほとんどの海が深海棲艦によって占拠され、艦娘のいる日本近海のみが唯一の安全水域。

「艦娘」

深海棲艦に唯一対抗できる少女の姿をした、なにか。２４年前に日本のみに突如として現れた。こちらもよくわかってないので艦娘についての研究が進められている。武装は深海棲艦と同じく大東亜戦争の時代の物だが、昨今の研究でかなり改装・強化ができるようになった。

「初期組」
　艦娘に現れた艦娘5人（吹雪・叢雲・漣・電・五月雨）。初期艦とも呼ばれる。以降、艦娘は彼女たちの指導により建造又はドロップで増えていったが、彼女たちがどうやって現れたかは不明。

「ケッコンカッコカリ」
　艦娘は人間ではないため、本当の結婚はできないが艦娘が所属する艦隊の司令とそれっぽいことすることによってレベル１００という壁を超えることができる。

「ポーンペイ先遣隊」
　司令を有明、事務を電、護衛を鈴谷が務めるポーンペイ島を調査するための部隊。海軍中枢はポーンペイ島に南部方面前線基地の建設計画をしている。

「艦娘学校」
　実践的な技術と学問を艦娘に教育し、『改』レベルにアップするまで艦娘が在籍する海軍の艦娘専用教育施設。
　横須賀、呉、佐世保に設置されていて、函館、大湊、新潟、那覇にも分校がある。

「そうりゅう型原子力潜水艦」

全長約１２０ｍ、基準排水量約１００００トン。米海軍のオハイオ級原子力潜水艦を元に初めて日本が採用した原子力潜水艦。三菱、川崎、東芝、日立の共同プロジェクトチームが原子炉の小型化に成功し、原子力潜水艦とは思えない程のコンパクトサイズとなっている（建造コストも安い）。ＳＬＢＭも搭載されているが、対艦戦メインとなっていてコンパクトゆえの機動力と原子力潜水艦ゆえの持久力を活かした魚雷やシースパローでの対艦戦を得意とする。深海棲艦出現で建造が遅れていたが、一番艦のそうりゅうと二番艦のうんりゅうはすでに就役していて、共に第２潜水隊群（横須賀）に所属している。三番艦と四番艦も建造中で、八番艦まで建造予定。

「海軍大学校」

海軍士官を養成する海軍の施設で、海軍兵学校の後継組織。四年制で、卒業すると練習航海と部隊実習をへて海軍少尉に任官する。所在地は広島県江田島。

「ポーンペイ島」

ミクロネシア連邦の首都。ポンペイ島とも呼ぶ。しかし、深海棲艦の出現により物資

や人の出入りが難しくなり、全島民は島外避難中。

「艦隊遠隔サーポートシステム（ＦＲＳ）」
　ここ数年で開発されたシステム。サポートと名がついているが、出来る指示は陣形変更と撤退指示。あとは、戦況の大まかな流れが分かるだけという実用性に欠けるもの。

「野外給湯器改４３」
　野外給湯機改４３は甲型、乙型、丙型があり、電が扱っているは小型の乙型。Ｔ―ｆａＬよりもはやく、沢山のお湯があっという間にすぐに沸くらしい。

「パナソニック製家庭用ファクシミリ付電話機」
　ポーンペイ先遣隊が所有する唯一のオンラインな通信機器。

「グアム分基地」
　アメリカ海軍グアム基地内にあり、艦娘専用の対深海棲艦用分基地。横須賀鎮守府管轄。

「海軍幕僚監部」

市ヶ谷の防衛省に構えている、海軍の中枢部。忙しすぎ・働きすぎのため、「過労」で労災認定された人がたくさんいるとかいないとか。

「間宮」

平時、暇な給糧艦間宮が運営している甘味処。ただし、横須賀など大きな鎮守府では「間宮商店街」が形成されていて、甘味処のみならず、食事処、P・X・、銭湯、映画館、ゲーセンなど大きく展開されているところがある。

第2章　有明誠という人間

2―1さらば諭吉

有明を司令室まで案内し、用を終えた吹雪は先に司令室を後にした。

しかし、吹雪が司令室から出てくるタイミングを待っていた少女。ーーー電が彼女を呼び止める。

「ちょっと、いいのです？」

「電ちゃん：　鈴谷ちゃんは？」

「損傷はないのですが、念のため精密点検をさせてるのです。無人島じゃできないので」

「そうなんだ。ちょっとエアコンが効きすぎてるわね。ここは少し寒いから、屋上に行きましょ」

寒いーーー本当に寒いわけじゃない。偉い人達の隠語で良くない事を話したい時に使う。

「わかったのです」

電もその旨を理解し、吹雪の進む後に付いて行った。

＊　＊　＊　＊　＊

グアム分基地は艦娘関連施設など多くの施設を仮設で済ませているが、司令室などの重要施設は頑丈な米海軍庁舎の一部を間借りしている。

電たちはその屋上へと足を運んでいた。

庁舎の屋上からは穏やかな海が一望できる。

そんな風景を見て電は

「この辺はちょっと前に比べて随分と穏やかになったのですね」

と声を漏らした。グアム、サイパン周辺に艦娘艦隊が初めて足を踏み入れたのは、七年前。

それから三年の歳月を掛けて８０％以上、海域を奪還した経緯があるからだ。

「で、なんであなたがこんな辺境にいるのか、本当の理由を教えて貰ってもいいのです？」

と電が問を投げかけた。

「ほっんと、あなたって鋭いわね」

吹雪は呆れ顔で答えた。

「鋭いもなにも、『艦(ふね)』である艦娘にも関わらず、海軍軍人でもある艦娘なんて両手で数

えられる人数しかいないのです。そのなかでも、最高位の海軍少将である久美浜舞雪がこんな前線に来たら、誰もが疑うのです」
「まぁ、そうだよねー。でもね電ちゃん。久美浜舞雪が私、初期組の吹雪だって知ってる人間も艦娘もそうそう居ないから。制服着て髪を下ろしたら、みんな吹雪だと気が付かないしね。それに私、電ちゃんにも教えた記憶ないんだけどなぁ～」
「それはそれ。これはこれなのです！」
「いや、そんな笑顔で言われても・はぁしょうがない。まぁ、電ちゃんなら、話してもいいか」
「でっなんでこんな前線にいるのです？」
「・・・・内偵よ」
　電の質問から少し間が空いてから、吹雪はボソッと吐き捨てた。
　それを聞いた電の顔もいつもの笑顔から、真剣な物へと変わる。
「吹雪ちゃんがわざわざ出てくるってことは・・・・アレですか？」
「そう。海軍指定特別機密事案第三号の調査中なの」
「誰が内偵対象なのです？」
「グアム分基地司令、海軍中佐清水神人」
「!?・・・・そいつ、やばいのです？」

「いや、どうやら私が出る程でもなかったわ。でも、気は抜けないわ」
「と言うことは･･･ また彼を･･ ＮＤＳ情報武官である有明誠を使うのですか？」
「そうよ」
そして、また二人の会話に間が開く。
２人の周りには海から聴こえてくる風の音のみが音として存在してた。
しばらく無言の状態が続いたが、今度は痺れを切らした吹雪から先に電に話しかけた。
「あなたの気持ちもよくわかるわ。だから、人事操作して彼を前線に送り込むことによって、中央である市ヶ谷から遠ざけようとしたんでしょ？」
「・・・・」
「でもね、彼は海軍にとって必要不可欠なのよ。あの高い能力をもつ人材は絶対手放せないわ。これは私だけの考えじゃなくて、海軍中枢部の総意なのよ」
電はようやく閉ざした口を再び開けた。しかし、いつもと違う感情的な口調で。
「だからって、だからって、だからって、有明ちゃんを使い古していい理由にはならないのです」
「それでも彼ほどの人材を暇にさせておくほど、海軍には余裕が無いのよ。こんな事言える立場じゃ無いけれど、今回は私に免じて見逃してくれないかな？」

しばらく吹雪をにらみつけたのち、無言のまま電は扉を開き、屋上から立ち去った。

＊　＊　＊　＊　＊

「これからはお前の上司になる。よろしく」

グアム分基地司令清水神人はこう高らかに言い放った。

「おっと、いきなりでしたね。あまりに嬉しかったものでつい舞い上がってしまいました。失礼。キチンとあなた宛ての新しい辞令を読まなくてはいけませんね」

ニンマリしながら、封筒を手にした清水はその中身を取り出し、辞令を読み出した。

「通達。貴隊の報告に基づき、ポーンペイ島に拠点設置工事が可能と判断された。よってポーンペイ先遣隊をポーンペイ派遣隊に昇格する。拠点の整備・防衛に務めよ。

また、ポーンペイ派遣隊司令指揮下に第一艦隊を設立する。

これに伴い防衛担当艦として、駆逐艦　睦月（高雄基地所属）・駆逐艦　霞（横須賀艦娘学校所属）を配属する。

なお常設部隊に変更となったため、貴隊の管轄は横須賀鎮守府直属からグアム分基地

に移管される。以上」

辞令を有明に手渡し、感慨深げに深呼吸をした清水はそれに続き、口調を変えこう言い放った。

「・・・つまり、君はこれから私の部下となるのだ!!私はこの日をいつも夢見ていた。海軍大学校時代、何度も何度もお前みたいなクソ人間に出し抜かれて、この優秀な私が次席に甘んじる日々。

どんなに、どんなに、どんなにこの日を・・・ 君の上に立つ日を待ちわびたか!」

独りでハイテンションなっている清水。だが、有明はノーリアクションだ。ここまで大袈裟にやられるのはまれだが、嫌われ者の有明はこういった事態に慣れている。

それどころか、どうでもいいとすら思っている。

なぜなら今、彼の頭の中にあるのは『間宮のｆｒｅｅＷｉ―Ｆｉを使ってログボ!ログボ!』というネットが無人島によって鎖されていた中毒者の禁断症状に支配されていたから。

「・・・派遣隊昇格の命、承知しました。用はそれだけです、上司殿?」

「あ?・・・ ああ。・・・ まぁ下がっていいぞ」

有明が悔しがるだろうと期待していた清水は、あまりにも普通の対応に呆気に取られながら、退出を促した。

そして、
「では、失礼します」
と有明は笑顔で司令室を出ていった。

＊　＊　＊　＊　＊

鈴谷の入渠、電の用事、有明の辞令。そして、防衛省への最終報告書提出。
各々の用事を終わらした一行は、吹雪とともに間宮へと足を運んでいた。
「なんでも頼んでいいぞ！間宮は社員食堂みたいなもんだから、商品みんな原価販売でやすいからな！」
約３週間インターネットから隔離されていた有明は、間宮のｆｒｅｅＷｉ―Ｆｉによって水を得た魚のようなテンションで、懐が緩んでいるようだ。
「ホントに？なんでもいいの？じゃあ・・・　これにする！」
鈴谷は目をキラキラと輝かせながら、『赤城専用！バケツパフェＤＸ　ＰＲＥＭＩＵＭ　３９８０円』を指していた。大量の生クリームと色々な味のアイス、フルーツがふんだんに使用されているそれは、パフェというか丼物だった。
だが、今のフィーバー状態の有明には痛くも痒くもない！

「あぁ頼んでいいぞ！吹雪も奢るぞ！」
「えっ！ホントですか！じゃあ、このチーズケーキセットでお願いします！」
吹雪の頼んだ『チーズケーキセット　８００円』は可愛らしいチーズケーキに高級紅茶がセットの至極の逸品。
こんないいものを８００円で提供できるのは、海軍だからであろう。
そして注文は電の番。だが、彼女の持っているメニューだけなぜか『黒い』。
その黒いメニューには金文字で『裏メニュー』と記してある。
それを確認した有明は察知した有明は、すぐにフィーバータイムを強制終了。
『ゴホン（流石にそれはやめてください）』と咳払いで電とコンタクトを取るが、電はそれを着拒。コンタクトに構わず裏メニューのデザートページを開く。
有明の額からは汗がダラダラ吹き出し始めた。
彼は1度だけ舞鶴の間宮タウンで、あの黒いメニューを見た事がある。
やれ懐石やら、フレンチコースなんかが掲載されていてランチの癖に万超はザラ。中には6桁もあったとか。
その当時は『やっぱり、舞鶴のような鎮守府は客人も多いから接待用にちゃんとしたものも用意してるんだな』とか軽く考えていたが、まさかこんな前線にもあったとは。
さすがの有明でも動揺を隠せない。

そんな有明を1ミリも気にせず、電は
「この栗テリーヌがいいのです～♪」
と無邪気に店員のお姉さんに注文していた。
「ちょっと、そこの電さんや」
「なんだい、有明司令さんや」
「そのテリーヌいくらするのかね？」
「気にしすぎなのです～。さすがにデザートひと皿はそんな高くないのです。たったお札1枚なのです～」
「はぁ、たった英世1人かか。良かった。そうだよな、たかがデザートひと皿だもんな」
「諭吉ひとりなのです～」
「諭吉ィィィィ。お前はいい奴だったァァ。なぜ、デザートひと皿で諭吉が旅立たなきゃならんのだぁぁ」
「えっとですね、このテリーヌは京都は福知山の足立音衛門製で、仕入れ代と特別輸送費がかかるのでこの価格なのです♪」
「なんっだと・・・」
そして運ばれてきたテリーヌを一口づつ試食した一行はその驚異の美味しさに舌を溶かし、あと2皿も追加注文して堪能したそうな。

「うっうっ。くそ。美味しいじゃねぇか。でも、このテリーヌのせいで財布のＨＰがまじやばだよ。しょうがねぇ、ちとＡＴＭ行ってくるわ」

そして有明は防衛省共済組合のＡＴＭまでダッシュすることとなった。

全員が甘味を食べ終わって、お茶を飲みながらのまったりタイムに突入する。

「そのバケツパフェよく食ったな、鈴谷」

「まぁね～。それより、この後の詳しい行動予定はどうなってんの？」

「あっ私から説明しますね～」

鈴谷の質問には吹雪が応答した。

「みなさん、ＩＤカードは持ってますよね？」

有明達は縦に首を降る。

「みなさんのＩＤで全て予約を済ませてるので、今夜は有明大尉が士官宿舎、艦娘の２人は艦娘宿舎に受付でカードを見せるだけで泊まれます。翌日は明朝、〇八〇〇時に出発予定の厚木行Ｃ―１輸送機で本土に向かってください。こちらもカードを見せるだけで搭乗できるようになってます」

「その後は休暇か？」

有明が真剣に質問する。彼にとって休暇は大変重要だから（積みゲー消費しないといけないからね！）。

「ええ。休暇です。1週間ゆっくり休んでください。その後は先ほど大尉に通達された辞令どうりです」
「そうか、了解した」
「では、私はこれで。まだ仕事が山積みですから、戻ります。有明大尉、ご馳走様でした」
そう礼を伝えながら、吹雪は独りで先に間宮を後にした。
「ふう。じゃあ、俺達も宿舎に向かうか。辞令の内容とかは歩きながら話すよ」
「わかったのです!」「はーい」
そして、3人は席を立つかと思いきや電が
「手を合わそるのです!」
と促し「ご馳走様でした」と挨拶した。それに続き鈴谷と有明も
「「ご馳走様でした」」
と挨拶する。
電は無人島での活動はチームワークが大切だからといい、初日にこの給食式挨拶を導入。以来、ポーンペイ先遣隊の伝統?となったらしい。

＊　＊　＊　＊　＊

有明は宿舎に向かう道すがら
・1週間休んだらまたポーンペイに行く
・今度は派遣隊になる
・ポーンペイ防衛用の艦隊ができて、睦月と霞が仲間に加わる
・ポーンペイに小さいながら、派遣隊用の建物ができる
ことを伝えた。
そして間宮から5分ほど歩いたところで、有明は電・鈴谷と別々の宿へ向かうため「また明日」と言って別れた。
有明は今日の宿『日本海軍グアム分基地士官宿舎』に到着した。士官宿舎と言っても、基地の隊員ではない士官達のための宿舎で、３０室ぐらいある部屋はほとんどガラガラ状態に見る。
受付のおばちゃんにＩＤカードを見せてながら
「こんばんは、有明大尉です」
と話しかけると
「お疲れ様です。お待ちしておりました。こちらがお部屋の鍵になります。二階エレベーター前の２０３号室です」
と鍵を貰った。

どの基地の宿舎もこのやり取りで終わりなので、有明が部屋に部屋に向かおうとすると、おばちゃんが呼び止めてきた

「有明大尉お待ちください。あなたが到着したら、電話してほしいとの言伝を受けていますので、今からおかけしてよろしいですか？」

「はぁ、俺にですか？」

「はい、なんでも至急電らしいです」

といっておばちゃんは固定電話のダイアルをメモを見ながら回した。ダイアルが完了すると、受話器を有明に渡す。

「プルルルルルルン、プルルルルルルルン」と発信音のあとに「もしもし？」と相手先が電話に出た。

「有明ですが？」

「あっ班長ですか!!宿舎に到着したんですね！お疲れ様ですー」

「その声は、境か？」

「はい、境です！」

「何の用だよ？こんな、南の島にいる奴に。てかもう班長じゃないし」

「いや、俺の班長は有明中尉ただ1人っす！」

「悪いな、今は有明大尉なんだ。しかも、現班長はお前だ。ちゃんと仕事しろっ。で、本

当に何の用だよ」

「はは、手厳しい。えっと海軍幕僚長より命令です。『帰国次第ＮＤＳに出頭せよ』と」

２―２許さない…許さないんだから！

ＮＤＳ―――正式には日本国特別協議執行機関『国家防衛公安会議』。
それは内閣総理大臣・防衛大臣・国家公安委員長などの政治家。
防衛省・警察庁・法務省などの背広組と呼ばれるいわゆる官僚。
日本陸軍・海軍・空軍・海上保安庁・警備警察・公安調査庁などの上級士官や上級幹部。
そして、選び抜かれた各機関から少数の現場職員が所属し『表』の法律や組織では対処できない国家危機を『裏』で解決すべく、設立された秘匿組織。
無論、２４年前から日本、そして世界を脅かしている『深海棲艦』の対処、解決手段の模索も国家防衛公安会議の使命のひとつとなっている。

＊　＊　＊　＊　＊

海軍が空軍からパイロットごとレンタル中の川崎製輸送機『Ｃ―１』。
人・物・艦娘を運ぶのに深海棲艦がはびこるこのご時世、大活躍中である。

そんな、C―1は有明達一行を乗せてグアム国際空港を離陸、厚木に向けて飛行していた。

『ポーン』という音と共に『シートベルトをしめよ』（FASTEN YOUR SEAT BELT）と書いてあるランプが消灯する。

「むー、座り心地悪いよー」

鈴谷はC―1の座り心地にご不満のようだ。

「たしかに、この椅子で三時間はキツイな」

「私は大丈夫なのです～サイズもピッタリだし」

有明は鈴谷に肯定するが、電はちがうらしい。

というのもこのC―1、本来3時間もの時間がかかる距離を人員輸送することを想定している輸送機ではないので、サイドに簡易的な椅子が電車のロングシートのように設置されているのがデフォルトだったが、海軍に貸し出された時に改装し、機体前半分に進行方向と同じ向きに補助席みたいなつくりの座席を設置して、後ろは郵便などの軽貨物が積載されている。

電が小さいから補助席がフィットするんだなと思った有明はつい、電と話してはいけないことランキングBEST1位と2位の『年齢』と『容姿』についていじってしまう。

「電は見た目は子供でも、頭脳は三ｓ・・・」

と言いかけたが・・・ 電がそれを許すわけなく、阻止するためカシャっと拳銃を有明の

こめかみに当てて有明の口を停止させる。
「・・・見た目が子供はまぁ、この際目をつぶってやるのです。頭脳が・・なんといったです？」
「いっい電様？なぜ君はコルトガバメントなんて持ってるのかな？てかどこから出てきたのさ」
「しばらく兵装を使ってなかったから、点検のためにグアム分基地に預けてるのです。そしたら、グアム分基地の知り合いが護身用にって用意してくれたのです～。そんなことより、脳天ぶち抜かれたくなかったら、さっさと答えるのですよ～♪死にたい人はどこなのです～？」
「いやー、電様がこの世に降臨されたのは２０と４年前の事ですので・・・降臨した当時の容姿年齢や精神年齢が若く見積もって８歳ぐらいだから、足すと３０歳ぐらいになるかと・・・思ったのですが・・・なんか、すいませんでした」
　電の目が怖い。瞳に光がないよ！
「いいですか？有明司令官さん。私はこの世界に来てまだ２４年、だから２４歳なのです。あいあむ・とうぇんてぃ・ふぉー・いあーず・おーるど。おーけー？」
「おっオーケー」
　このやり取りを傍で見ていた鈴谷は自爆したのは有明だが、話を振った自分なので

少々責任を感じていたが、それ以上に怖くて二人のほうを向くことができなかった。
それと、電には歳の話を振ってはいけないことを、心に刻んだのである。

＊　＊　＊　＊　＊

『CAMEL502（キャメル502）, Atsugi tower（厚木タワー）. Wind 200（風は200） at 3（方向から3ノット）, Cleared to land（滑走路01に着陸を許可）, Runway 01（滑走路01）.』
『Cleared to land（キャメル502、滑走路01へ着陸許可）, Runway 01（了解）. CAMEL502.』

熟練のパイロット達の腕によって、C―1は厚木海軍飛行場に着陸した。
駐機場所に到着し、有明たち一行はクルーに礼を言いながら機体を降り、厚木の土を踏む。
「着いた～！久しぶりの日本～さっさとお家帰って今日はアニメとネトゲして寝る！」
有明は体をのばしながら、今日はぐうたらすると宣言した。
が、伸びを終えた彼の視界に一人の海軍士官が目に入る。
袖の階級章は太い金線と細い金線がひとつづつ。中尉であることを示している。
見た目は、有明より少し若い男性。
「有明班長～」

その男性が有明の名を呼びながら笑顔でこちらへ向かってきた。
だが、有明はそれを確認するや否や見事なフォームのスタンディング・スタートを決め、フルスロットルでダッシュし逃走を図った。
「悪い、境。今日は重要な予定があるから帰る。ＮＤＳには行かん」
そう、この海軍中尉は元有明の部下で、グアム分基地滞在時の有明宛に電話をかけてきた『境（さかい）、淳之介（じゅんのすけ）』中尉。
海軍の中でも珍しい、有明を慕う人物のひとりだ。
そして有明という人間とイロンナ意味で理解しあえる人間だ。
ちなみに有明が逃走するのは『上』の人も想定内で境はそれを阻止せよと『上』から命令されているので、やれやれと思いながらも有明を呼び止める為に、猛ダッシュの有明が聞こえる大きさの声で話しかける。
「班長ぉ～、幕僚長が有明が今日中に来なかったら、『私の権限で盆の３日間を出勤日にして、有明がビックサイトへ行けないようにする』って言ってました～」
「は？」
有明は逃走を一時中断し、境の声に耳を傾ける。
境も有明が話に予想通り食いついたので十数メートル離れている有明の元へ行き、話を続ける。

「ですから、幕僚長が『コミケの日をポーンペイですごしたいか?』とおっしゃっていました。意訳すれば」

「・・なんだって!?幕僚長は俺がオタクだって知らないはず。・・ だよな?そもそも、お堅くてサブカルとは無縁な幕僚長がコミケの存在を知っているとは考えられない。なぜだ・・なぜそんな恐ろしい事を幕僚長はおっしゃったんだ・・ まさか、貴様の入れ知恵か境?」

「いえ、本官もジャンルは違いますがコミケ戦士ですので、そんな惨いまねは流石にできませんよ」

「じゃあ、じゃあ、いったいなぜ幕僚長はそんな恐ろしいことをおっしゃったんだ・・・」

今日のアニメ&ネトゲとコミケ三日間は天秤にかけずとも、コミケのほうが有明にとって大切なのは明らかなので仕方なく有明は逃走を中止し、降参してＮＤＳに出頭することとなった。

＊　＊　＊　＊　＊

ここは厚木基地の駐車場。

有明はここから境の回してきた車に乗り、ＮＤＳ本部へと向ことになった。

出発する前に、有明は鈴谷と電に別れのあいさつをする。

「電、鈴谷。約1ヶ月もの間お疲れさん。俺はちょっくら残ってる仕事片付けてくるが、電と鈴谷は休暇のあいだの1週間、ゆっくり休んでくれ。1週間後から、またよろしく頼む」
「はいなのです」
「仕事、頑張ってね～」
「そういえば、鈴谷は1週間どこで暮らすんだ？呉の艦娘寮は退去したんだろ？」
　もともと艦娘学校の学生艦だった鈴谷は、学生や海軍で働く艦娘が生活を営むために港の近くに建設された『艦娘寮』に入居していたが、学校が呉なのに対して配属先が横須賀（もとい南の島）だったため、退去していた。
　今の鈴谷は人間でいうところの住所不定者なのだ。
「それは大丈夫。電ちゃんが持ってる横浜のマンションに居候させてもらうことになってるよ」
「そうか、じゃあ電。鈴谷のことよろしくな。彼女はまだ、外界をあまり知らないだろうから」
「任されたのです～」
　境の「班長、そろそろ」という声に促され有明は車へ乗車。
　車は厚木基地の門を抜けて、ＮＤＳ本部施設のある永田町へと発進していった。

＊　＊　＊　＊　＊

東京都千代田区永田町。
国会議事堂や総理官邸などが立ち並ぶ文字通りの日本の中心街だ。
その中心街にそびえ立つ１５階建てのビル『中央合同庁舎第８号館』に有明と境の目的地、ＮＤＳ本部施設が設置されている。
だがこの本部施設、秘匿組織だけあってたどり着くには複雑な道順を辿らなければならないのだ。
まずは横のビル、『内閣府庁舎』の受付嬢（おばちゃん）に　笑顔（愛想笑い）で防衛省職員証を提示して一般受付を通過する。
この時注意しなければならないのは、忙しそうな雰囲気を醸し出しサクッと通過しなければいけないことだ。
ここでミスると受付嬢に「あら～、誠ちゃん久しぶり～元気にしてた～？」と引き止められ、３０分ほど足止めをくらう。
だが、有明と境は何度もここに出入りしている。
いわばサクッと通るプロだ。

受付嬢があくびをかいた瞬間を狙って間髪入れずに通過していった。
ここを通過すると、連絡通路経由で第8号館に入館でき、次の難関『隠し扉』が待っている。
隠し扉は地下三階の『補助電気室』と呼ばれる非常用発電機が設置されている場所にある。
この補助電気室には政府に対するテロの標的になりかねない，内閣府の非常用発電機を守る，という名目で黒服の警察官3人が配置されている。
だが、実際はＮＤＳの門番達なのだ。
境は彼らに半年毎に変わる本部へ入るための暗号を伝える。
「パンツはブリーフ派だ」
「そうですか、私もブリーフ派なんですよ。気が合いますね」
3人いる黒服のうちの1人がそういいながら、握手を求めてくる。
だが、何故か黒服は手にはめている手袋を外さないで握手をもとめている。
一方、境は正装の白手袋外し、握手に応じる。
黒服が手袋を外さずに握手を求めて無礼に見えるかもしれないが、これでいいのだ。
黒服がはめているのは手袋ではなく、手袋型生体認証装置。毛細血管を読み取り本人かどうかを確認するシロモロだ。

握手を終えた黒服は有明たちをＮＤＳ構成員と確認、「お疲れさまです。あと、私本当はボクサーパンツ派なんです」と言い、隠し扉の鍵を開け中へと誘導する。
すかさず境も「お疲れさまです。私もボクサーです。ブリーフ派なんて、総理ぐらいですよ」と返事をしていた。
両者ともそこには謎のプライドがあったらしい。
ともあれ、隠し扉を過ぎたあとも『１０桁のパスワードとＩＤカード認証が必要なエレベーター』や『顔をカメラで認証する長い廊下（不審者侵入時はここで毒ガスを浴びせる）』などの厳重なセキュリティを通過して、やっと現れるＮＤＳ本部の入口、木目調の大扉の前に有明たちはたどり着いた。
ここで彼らは制服をもう１度正し、粗相のないように気を配る。
総理や大臣などお偉いさんがたくさん居る（かもしれない）からだ。
「あっやべ。この前の電特製『南の島カレー』のこぼしたシミがワイシャツに付いたまんまだ。まぁ、上着着ればわかんないしいいか」
「相変わらず、適当ですね班長は」
「臨機応変な判断と言っておくれ。――――さぁ入るぞ」
「はい」
有明は自分の身長よりもかなり大きいドアをゆっくりと開けた。

＊　＊　＊　＊　＊

ドアの向こうには広い壁全面に並ぶモニター類がズラリと並び、半円卓の議場がそのモニターの向きに配置され、そのうしろにはエヴァの司令部のような構造をしているオペレーター達のデスクがひな壇形式で配置されている。

そのひな壇から、一人の男性が降りてきた。

歳は定年まじかという感じで、青い内閣府の作業着を着用している。

「情報武官有明大尉、艦娘研究班長境中尉。国家防衛公安会議への御足労、ありがとうございます。それから、有明大尉。お久しぶりでございます」

「直江津（なおえつ）会議事務長、ご無沙汰してます」

「直江津さん、お疲れさまです」

有明と境はそれぞれ直江津に挨拶をする。

彼の役職は会議事務長。

この裏組織の事務の長を担当し、緊急時には司令部オペレーターの指揮を執るそこそこ偉い公務員だ。

「あぁっそういえば遅れましたが、有明大尉。大尉へのご昇進、誠におめでとうございます」

「いえいえ、こちらこそ。あまり、ここに顔を出さなかったものですから‥ それより、今日は海軍幕僚長の命で出頭したのですが、まだいらしていないのですか?」
「只今金沢(かなざわ)海軍幕僚長は防衛省のほうで来客対応中らしく、それが終わればこちらへいらっしゃると伺っております‥ それと、有明大尉・・・」
直江津は目線を半円卓の机の横にある、偉い人の部下達（現場級職員）が作業するの長机の方へ目むける。
「あ〜、愛されてますね有明班長」
境もその方向をむき、机の上で書類を枕にして寝ている彼女を見つけ有明にそう言う。
「別に、アレはただのルームメイトだから‥ 愛されてるわけじゃねーし、あと今の艦娘研究班の班長はお前だって言ってるだろ、境」
有明はそう言いながらも自分の上着を脱ぎ、机と椅子で座りながら寝ている彼女にそっとかける――――が、
彼女は「むにゃむにゃ・・・・・ぅぅぅむにゃ?」
と起きてしまった。
「あっ起きちまったか?悪かったな、冷えると思ったんだが」
彼女は寝ぼけながら

「今…　なんじ？…　当直でここにずっといたから…　感覚が…」
　有明は腕時計をみながら
「今か？今は午後15時ぐらいだぞ。当直だったなら帰ればよかったのに」
　と答える。
　秘密組織ＮＤＳには当直制度が導入されており、各機関の比較的若い構成員が日替わりでいつ起きるかわからない有事に備えることになっている。
　有明のセリフを聞いた直江津は『この鈍感野郎』と心に思いながら、有明にこう告げた。
「有明大尉、厳原暁子（いづはらきょうこ）警部補は大尉が厚木から直行すると知るらいなや、勤務時間が終了しても大尉のお帰りをこちらでずっと待っていらしたのですよ」
　ようやく目がさめてきた彼女はそのセリフを聞いてハッとする。
「むにゃ？…　ありあけ？・・・・誠っ！いつからいたの!?」
「いや、お前が起きた時にはもういたが…　それより、髪がぐちゃぐちゃしてるぞ」
　彼女はそう言われるとシャシャっと髪を整え、有明の方を向き真面目な顔で
「誠。なんで何も言わずに海外出張とかいくの!?私、帰って来なくて心配だったんだからね」
　と有明に訴える。

さすがの鈍感有明も悪いと思い

「あぁ、悪かった。暁子。行く前に電話するの忘れてた」

と謝罪した。

暁子は有明の胸に飛びつき、胸の中で泣きつきながら、こう言うのであった。

「次ぎやったら、許さない…許さないんだから！――――――とおっても心配したんだから」

２―３秋葉ハウス

解体。

初期組の艦娘がこの世に降り立ってから数週間、彼女達の乗組妖精によって駆逐艦や軽巡洋艦など比較的小さな艦(ふね)が建造され始めた。

その際にある妖精のミスで偶然できてしまった『艦娘の人間化』。

これが艦娘史上初の解体である。

艤装は分解され資材となり、艦娘の心と体は人間化され海上戦闘も入渠回復もできない年々歳をとる人となり・・・じゃあ、その艦娘の乗組妖精は？

そう、妖精は消えなかったのである。

この消えなかった妖精の末路が後の工廠などに陸上勤務をこなす専門妖精となった。

ちなみに艦娘を失った妖精のおおよその寿命は１０年。

艦娘が艦娘として生きていればその間は老化しないが、母艦の艦娘を失うと約１０年をかけて老化し、最後はパタッと倒れ消えてしまう。

また、人間化された艦娘も解体の際に艦娘として過ごした年月分老化する現象がおきる。

例えば、呂５００が十数年の艦娘としての役目を終えて、解体・人間化した場合は一気に２０代の容姿へと変貌する。
そして、その変貌後の姿は同じ名前の艦娘でも艦娘として過ごしてきた環境の違いによってかなり変わってくるのも解体の特徴。
また、解体は妖精のミスが原因でできるようなったのでその詳細は全く解明されていない。

＊　＊　＊　＊　＊

ここは中央合同庁舎第８号館の地下。
日本国特別協議執行機関『国家防衛公安会議（NDS）』の司令室。
有明の胸に飛びつき、しばらくピーピー泣いていた厳原暁子はようやく正気を取り戻し、ヒックヒックしながらも話はじめる。
「誠の顔を見れて安心したわ。変わりなさそうね」
「ああ、暁子もそんだけ泣けるなら元気そうだな。眠そうだけど」
「ええ、ほんとよ。あなたをここで仕事しながら待っていたら、１７時間勤務になっちゃったわよ。先に家に帰って一寝入りさせてもらうわ」

「ああ、それがいい。用事が終わったら俺も帰るよ。ご飯も今晩は俺がつくろう」
「そう、たのしみにしてるわ♪」
この会話を聞いていた境や直江津事務長を始めとする組織の職員一同は『爆ぜろ、リア充。さっさとくっついちまえ』と誰もが心の中で考えていたが、当の有明は疎いという２文字では済まされないような鈍感男だし、暁子も最初は好意を有明に向けていたが、あまりの鈍感さに疲れてしまい、最近は親友という形でいいかな?と自分へ念じるようにしているらしい。
そんなこんなで、暁子が帰宅し司令室に静寂が訪れた。
と思ったのもつかの間、すぐに入れ違いで大物２人とそのお付きの人達がＮＤＳ司令室に入ってきた。
ＮＤＳ職員達も一瞬でモードを切り替える。
大物の片方は海軍大将を表す、これでもかというサイズの金の太線１本と普通サイズの金太線３本、そして海桜の紋章をつけた袖章をもつ海軍の黒い冬服を着用した坊主の男性。
彼の名は『金沢大地(かなざわだいち)』。
日本軍の階級で最高位である大将の位を持ち、海軍十万五千人のトップ『海軍幕僚長』を務める人間だ。

一方、もう一人の大物は落ち着きを持ちながらもあからさまに高級感漂う上質なスーツを身につけている。
名は『岡田聡』。
元日本空軍少佐にして、現私立大学特任教授。そして国会議員ではなく、民間人の身分で防衛大臣を務めている人物だ。
ちなみに頭部サイドは髪の毛が残っているけれど、頂点の方に行くにつれてハゲている。
金沢と岡田は仲が良く官僚や政治家達から『ハゲコンビ』と呼ばれてるとかなんとか。
彼らは司令室にいた有明を見つけると、手招きして有明を呼び寄せる。
有明も即座に反応し、金沢と岡田と共に司令室の奥にある小部屋へと移動した。

＊　＊　＊　＊　＊

ＮＤＳ司令室の奥には色々な部屋がある。
現場級職員が事務的な仕事をする部屋や、偉い人たちが密会をする部屋などなど。
有明、金沢海幕長、岡田防衛相はそんな奥にある部屋のひとつ、小会議室に入室した。
金沢と岡田が椅子につき、岡田が座っていいよと有明の近くの椅子に手を差し向けた

ので有明も着席する。
「海幕長、大臣。お久しぶりです。海軍大尉有明誠、ポーンペイでの任務を完了し本日帰国いたしました」
「うん有明君、変わりないようで何よりだよ」
　最初に返答をした岡田防衛相は穏やかな口調だ。
　次いで金沢海幕長も返答をする。
「有明、ご苦労だった。久しぶりのＮＤＳ出頭な上に、帰国直後で申し訳ないが、私と大臣は後にも仕事が溜まっていてね・・・今しか時間が取れんかった。早速本題に入らせてもらうよ」
「ええ。構いません」
「よろしい。では、これを見てくれ」
　そう言いながら、金沢海幕長はひとつの紙切れを机の上に有明が見えるように置く。
「これは・・・ノートのコピーですか?内容は・・・艦娘の装備関係ですね」
「そうだ。これは警視庁公安部が最近押収したノートの１ページ。ＮＤＳ経由で防衛省に回ってきたんだが・・・ロシア系スパイから押収した物なんだ」
「なるほど・・ロシアですか」
　艦娘関係の情報は当然の事ながら、軍事機密であり民間や他国への情報発信はあくま

でも表面上なデータのみだ。
　これは日本の敵国となり得ない国が艦娘の情報を攻略し、深海棲艦と一緒になって攻めてくるのを防止するために必要不可欠。
　日米軍事同盟を結んでいるアメリカとて例外ではない。
　たが、太平洋を中心に広く世界で活動している深海棲艦に対抗できる戦力保有国（艦娘）が日本のみとなると当然、列強諸国はその情報を躍起になって集めるのである。
　金沢海幕長は続けて有明に
「そこで、君にはこの情報の流出元を調査してくれ」
と命じた。
　確かに有明は海軍軍人でありながら、艦娘の研究をする研究者として働いていた経験を持っている。
　艦娘の情報については並の海軍軍人、並の艦娘司令官よりも詳しいので、適任と言えば適任だ。
　岡田防衛相が続けて有明に話す。
「無論君はこの組織に制度上仕方なく、諜報員である『情報武官』として在籍しているが実際は専門外である事は把握している」
「そこで、今回はＮＤＳ専属Ｓ級エージェントを君の部下という体で派遣したい」

「S級の専属エージェントをですか⁉」
ＮＤＳ専属エージェントとは文字通り特殊部隊員と同等がそれ以上の能力を持っていて、有明のように警察や軍・公安調査庁など特定の機関に籍を置きながらＮＤＳ構成員なるのではなく、ＮＤＳのみに籍を置く人間を指す。
彼らの任務は主に諜報と工作で、Ｓ級ともなると片手で数えられる人数しかいない。
金沢海幕長は真剣な表情で
「ことはそれだけ重大なんだ。現在までの調査ではグアム分基地の清水司令が一番怪しいことが分かっている。この任務、引き受けてくれるな？」
と有明に問いかけ
「もちろんです」
と有明も即答した。
その後の説明によると、エージェントが『ポーンペイ派遣隊とグアム分基地間の連絡官』に扮し有明の部下として派遣され、調査任務を担当。
どの情報を重点的に集めるかを決めたりや情報を分析する役割に有明が就くことになった。
金沢海幕長が有明に
「最後になにか質問はあるか？」

と聞き、有明は頷きながら
「幕僚長、ひとつだけ」
と質問をする。
「うむ、なんだ？」
「幕僚長にお盆休暇（夏コミ）の件を吹き込んだのは厳原暁子警部補ですね？」
「ナンノコトカナ？オジサンサッパリワカラナイ」
「ソウデスカー」

＊　＊　＊　＊　＊

有明が退室した後の小会議室。
金沢海幕長と岡田防衛相がまだ退室せずに椅子にかけていた。
「有明君は君のお気に入りだそうじゃないか」
岡田防衛相はメガネ（老眼鏡）を拭きながら、金沢海幕長に聞いた。
「ええ、まあ。彼をＮＤＳに入れたのは私ですからね」
「だが、海軍全体としては有明君を嫌うやつが多いと」
「そうですね」

「私は彼と顔を合わせるのは今回が２度目であまり彼の事をよく知らないのだが、大丈夫なのか?今回の任務。これで何もわかりませんでしたじゃ、大変なことになるぞ」
　岡田防衛相の声色はかなり有明を信用していないものだったが、金沢海幕長は
「ご心配なく。彼ならやってくれますよ、我々の期待以上の成果を上げてきます」
　と即答した。

＊　＊　＊　＊　＊

『次は秋葉原です。都営新宿線、ＪＲ線、つくばエクスプレス線はお乗り換えです。Ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｓｔｏｐ　ｉｓ　ＡＫＩＨＡＢＡＲＡ．　Ｈ―１５・・・』
　ポーンペイに持って行ったスーツケースに入っていた私服に着替えた有明は、制服をスーツケースに詰めて東京メトロ日比谷線で自宅へ向かう。
　有明の自宅は世界有数の電気街で、世界一のサブカルの街、東京・秋葉原。万世橋を渡った先である千代田区神田須田町の４ＬＤＫ賃貸マンションだ。
　１０階建ての１０階に部屋があるので、エレベーターで移動し玄関のドアを開ける。
「ただいま～」
「えっ・・・・司令官?」

そこにはバスタオルを手にした真っ裸の鈴谷がいた。
そう真っ裸。
生まれた時と同じ姿。
風呂上がりでプルんとした水分をもつ、つやつや肌。
流石、艦娘の中でもピチピチのギャルなだけある。
正直、めっちゃ美しいし、めっちゃエロい。
いやそんなことを考えてる場合ではない。

有明の停止した思考は徐々に回復しーーーーー
「よし、鈴谷。落ち着こう。これは不可抗力の事故だ。示談をしようじゃないか」
と示談を持ちかけた。
「ーーーーーッッッ。ママっまた、まった見られた。これはもう司令官の脳天を機銃でぶち抜くしか・・・」
「え?ノウテン、ブチヌク?」

「とっ・・・　とにかく、出ていってーー」
「いえすー，ｍａ，ａｍ」
こうして、示談は失敗した上に異国の地から約1ヶ月ぶりに帰宅した有明は自分の家を追い出されたのである。
5分後・・・
玄関のドアがガチャっと開き、「入っていいわよ」と有明を迎え入れたのは厳原暁子だった。
今現在、リビングにいるのは有明、暁子、鈴谷の3人。
鈴谷はピンクのパジャマ姿でブスくれている。
「えっと・・・、鈴谷。さっきは悪かった。このとおり、謝る。申し訳なかった」
有明は頭を下げ謝罪したが、鈴谷はぷいっと頬を膨らまして返事をしようとしない。
こうなっては仕方がないと思った有明は、話を進めるべく疑問に思っていることを鈴谷に問うことにした。
「ところで、鈴谷。なんで俺の家にいるんだ?電のマンションにいたんじゃないのか?横浜の」
「・・・人間化した電ちゃんのお姉さんが神社の階段から落ちて入院したとかなんとかで、お見舞いしに青森まで出かけちゃって、ここに来れば大丈夫だからって地図と交通費を

貰ったの。それで、いざ来てみれば知らない綺麗なお姉さん…　暁子さんがいたの」

　そこから先は暁子が話を引き継いだ

「さっきまで通り雨が降っていたのよ。それで鈴谷ちゃん、ずぶ濡れになっちゃって風邪ひいたら大変だから一緒にお風呂に入っていたの。でも、バスタオルのストックが脱衣所になくて…　リビングに畳んだのがあるから取ってきてもらっていたら…　誠が帰ってきたのよ」

「なるほど、そうだったのか」

　ぷいっとしている鈴谷も、ダンマリをやめて有明に気になっている事を聞く

「ねぇ…　司令官。ここは誰の家なの？表札がなかったけど。あと暁子さんって司令官の彼女なの？」

「うーん。じゃあ順番に答えようか」

　有明はスマホで1枚の写真を開く。

「この部屋はな、友達4人でシェアハウスしてるマンションなんだ。これ、引っ越してきた時のパーティーの写真なんだが、これが暁子、そんでこっちが俺。あと男2人居るだろ？ここに写ってる4人で部屋を借りてるんだよ」

　スマホをポケットにしまい、有明は話を続ける。

「それで、暁子は俺にとって友達以上恋人未満、つまりは親友なんだよ。まぁ出会った経

緯とかは話が長くなるから機会があったら話すよ」
　鈴谷はじゃあと質問を重ねる
「暁子さんは何者？初めて会うはずなのに、昔から知ってる人みたいな感覚なの・・・なんで？」
「私は街のお巡りさんよ♪」
　有明がジト目をしながら『嘘をつくな』視線を暁子に向ける
「街のお巡りさんになりたかったの・・・　けど、実際は警視庁公安部で社畜してるわ・・・ハハハ」
「そして、警察官になる前は・・・」
　そう言って暁子は自室から紺色の帽子をもってくる。
　旧海軍の略帽を模したその帽子は錨のマークがあしらわれている。
　それを頭に被り、暁子はポーズを決めながらあの決め台詞を放った。
「　一人前のレディーとして扱ってよね！　」
　声色も大人ぽっくなり、姿もすらっとした美人のお姉さんだが、この姿を前にすれば艦娘なら誰でもわかる。
　鈴谷はぽかんとしながら・・・・
「暁ちゃん・・・　!?」

と漏らした。

2―4休暇と買い物

防衛装備庁艦艇装備研究所艦娘研究開発部。

そこは、艦娘の基礎研究・装備開発を一手に担っている日本、いや世界で唯一の機関だ。

その中でも第五艦娘研究室は特別とされている。

理由は特に政府が内々で調べたい事を研究するために、表向きには艦娘研究開発部の下部組織としているが、実際にはＮＤＳ直轄となっていて研究員はすべてＮＤＳ構成員となっているから。

第五研究室の一部門で、心理学・精神学から艦娘について研究しているのが艦娘心理研究班。

艦(ふね)の力を持ち、人間の心に近いものを持っている艦娘。死（轟沈）と隣合わせで戦闘を行う彼女達の心理を調べる事は極めて重要だ。

その重要な研究を仕切るのが班長である海軍中尉　境淳之介。

そして、その前任が当時海軍中尉の有明誠である。

＊　＊　＊　＊　＊

鈴谷は厳原暁子、有明誠ほか２人（計４人）のシェアハウスにて『ぽかーん』という顔をして驚愕していた。

「暁ちゃん・・・ !?」

そう。鈴谷の前で決めゼリフを決めた暁子は、容姿こそ立派な２０代ＯＬ風お姉さんなのだがーーー

「正解～♪私は『元』吹雪型２１番艦、特Ⅲ型・暁型のネームシップ。一等駆逐艦の暁よ！初期組の乗組妖精に建造された艦娘で、艦娘最初の暁であもあるし、あなたと同じ部隊に所属してる電のお姉さんでもあるわ！」

「え？・・・えーーーーーー!!!」

信じられない顔をして混乱している鈴谷に、有明が説明を続ける。

「まぁ、まだ艦娘学校出てから日が経ってないからあんまり考えたこともないかもしれないけど、艦娘は本人が希望して所属してる隊の司令官が認めれば退役ができるのは知ってるよな？」

「うん、でも実際は余程の理由があってもあんまり認められないって聞いてる」
　有明もそれには「確かにそういう風潮が海軍にはあるが・・・・」と肯定しながら
「でも、それは司令官しだいだ。俺はな、艦隊の司令官はポーペイ隊か初めてなんだけど書類上の司令官なら前の前の部署でやったことがあるんだよ」
　と言う。鈴谷は勿論理解できず「???」という顔だ。
「俺が横須賀の補給係に配属になる前は防衛装備庁で艦娘について武官研究員として研究をしていたんだ。その時に検体として俺の部下という扱いになったのが、暁子だったんだ」
　うんうんと暁子は頷く。
「当時の暁子、つまり検体である駆逐艦暁は今とは比べ物にならないくらいほど心を閉ざしていてな・・・ひと通りヒアリングとかで艦娘研究に協力して貰ったあと、本人の希望もあって司令官権限で人間化したんだよ」
　そこから先は暁子が話を引き継ぎ
「そして、私は警察官として、人間の女性として生活して余生を満喫しているわ！これで疑問の答えになったかしら？」
　と鈴谷に問う。
「うん。理解するのがやっとだけど、なんとなく納得したよ」

いろいろな想定外の情報が飛び込んできた鈴谷の脳内はパンク寸前だったが、暁子が何者かと、なぜ昔から知っている人みたいな感覚に陥ったのかは理解したようだ。

「それじゃあこの話は一区切りして、誠には鈴谷ちゃんを辱めた謝意も込めて美味しい夕ご飯を作って貰いましょ?」

暁子の提案で有明も「そうだな」と同意し、晩御飯を作り始める事にした。

といっても時間も時間で結構夜も遅めといえる時間になってしまっているので調理には鈴谷も手伝いとして加わることになった。(暁子は洗濯などの家事をする為不参加)

＊　＊　＊　＊　＊

秋葉シェアハウスの厨房では有明は食品庫と冷蔵庫の中身を吟味している。

近所には夜遅くまで営業しているスーパーがあるにはあるが、夜遅くに買い出しに行くのはめんどくさいのと三人とも疲れているため暁子が買い置きしていた食材で晩御飯を調理するようだ。

「玉ねぎ、コーン缶、ブロッコリー・・・シーフードミックスとーーーおっ、大きめのアサリもあるな。これならメニューはパエリアで決まりだな。鈴谷、パエリアでいいか？」
「パエリアかぁ。私、食べたことないな～」
　艦娘学校では食堂制で決まった給食が支給され、ポーンペイ隊でも電が作る食事は戦闘糧食が中心だったので（無人島なので仕方がないが）、鈴谷はパエリアを食したことがないみたいだ。
「おっ、はじめて食べるのか。それは、しっかり作らなきゃな」
「でも、パエリアってなんか細長い貝を使うんだよね？アサリで大丈夫なの？調理時間も結構かかりそうだし」
「家庭料理レベルなら、ムール貝よりもアサリの方が調理しやすくて失敗しないんだよ。しかも、パエリアは一品出せばそれだけでも立派な晩御飯になるだろ？そう考えるとあれこれ作らなくていいから、意外と楽だったりするんだ」
「へぇ～。司令官は料理、詳しいんだね？」
「まぁあな。海軍軍人として当たり前だろ？」
「船酔いするくせに？」
「ほっとけ」

そう言いながら、ちょっとニタニタしてる鈴谷をよそに有明は調理に取り掛かる。『スタタタタタタタタ』とニンニクをみじん切りに、タマネギを角切りにしていく有明の包丁裁きは見事な物だ。

普段から料理をしない鈴谷には残像しか見えなかった。

そのまま大きいフライパンに投入し、シーフードミックスやコーンなどと一緒に手際よく炒めていく。

暁子が事前に砂抜きをしてくれていたアサリをフライパンの中に入れ熱で開き、一旦取り出し米を投入。

スープを加えて煮込んだらあさりを戻し、別に調理していた野菜類を加えてシチリア産レモン汁で風味を整える。少し蒸らしてーーーー

「鈴谷、完成したぞ」

「えっもう完成したの!?手際良すぎて見とれてたよ。鈴谷、手伝いなのに何も手伝えてないじゃん」

「じゃあ、盛りつけ用の皿と飲み物を入れるコップをそこの棚から出して、その後テーブル拭いといてくれるか?」

「おっけー、任せといて」

晩御飯が完成したタイミングで暁子も家事を終え、三人は遅めのディナーを取りはじめていた。

「誠、明日はどうするの？私は仕事だから朝から出かけるわよ？」

暁子がパエリアをムシャムシャと頬張りながら、有明に問いかける。

「うーん、特に決まってないかなー」

「それじゃあ、鈴谷ちゃんとお買い物にでも行ってくれば？鈴谷ちゃん、東京は初めてでしょ？」

「うん、呉で生まれ育ってその後はポーンペイ勤務だから東京は初めてでさぁ、ここに来る途中人が多くてびっくりしたなー」

「鈴谷はせっかくの休暇を俺と買い物なんかで潰していいのか？」

鈴谷は「えーどうしようかなー？」とちょっと冗談を挟みながらも、どうせ休暇といってもやることも無いからと有明と買い物に行くことにしたようだ。

その後も楽しく雑談を挟みながら、３人は晩御飯をあっとゆう間にたえらげ素早く片付け・洗面をし寝室へ向かい眠りに入る。

鈴谷は暁子の部屋で布団を引いて寝ることになり、暁子と女子トークで盛り上がりたかったようだが、彼女が一番早く寝てしまった。南の島での勤務で相当疲れが溜まっていたようだ。

＊　＊　＊　＊　＊

翌朝、鈴谷が目を覚ますと暁子はベットにいなかった。
目を擦りながら、暁子のベットに置いてあった目覚まし時計を見ると長針は１２付近、そして短針は１１付近を指していた。
「１１時!?」
慌ててリビングに向かうと有明がソファーでくつろぎながらコーヒーを片手に新聞を読んでいる。
「おうっ、おはよう。よく寝れたようだな鈴谷」
「よく寝すぎだよ!!寝すぎちゃったよ!!海軍だったら、怒られるじゃ済まない時間だよ!!」
「まぁ、９時ぐらいに起こそかとも思ってたんだけど、かなりいい寝顔だったからな、ほら」
有明はそう言いながら鈴谷スマホを見せる。

そこにはヨダレを垂らしながら幸せそうな顔をした鈴谷が寝ている画像が映し出されていた。
「わぁぁぁぁ何撮ってるの!?消して！削除して！ｄｅｌｅｔｅして～！」

ひと通り朝のドタバタを済ました鈴谷は有明の作ったブランチを食べ、暁子に貸してもらった寝巻きからいつもの制服（茶色いブレザー）へ着替える。
着替えると言っても艦娘の制服は装備扱いなので、艦娘が着たいと思えば謎の力でプリキュアの変身のように展開される。
もちろん被弾時は入渠によって修復可能だ。
その他もろもろ準備を終えた鈴谷はリビングでソシャゲしながら鈴谷のことを待つ有明の所へ向かった。
「準備できたか？」
「写真消した？」
「おう、俺は消したぞ。準備が大丈夫なら、出発しようか」
「うん」
こうしてお昼頃、２人はマンションを出て秋葉原の街へ繰り出した。

＊　＊　＊　＊　＊

「どこへ行くの？」
鈴谷はマンションを出て歩き始めたところで有明に尋ねる。
「まずは今後ポーンペイを基地化するのに必要になる機器を買いに行く。買いに行くって言っても、知り合いの店にポーンペイからＦＡＸで注文しといたからサインするだけなんだけど・・・」
有明がそう答えながら、歩き始めて徒歩３０秒。
最初の目的地『下田商会』に到着した。
「はい、到着」
「到着速っ。マンションまだそこに見えるけど!?」
横開きの扉をガラガラと開き、２人は店内に入る。
どうやら店には店主が一人でいるようで他に客はいない。
「いらっしゃい～、って誠か」
「おう、久しぶり虎。注文したやつの金を払いにきた」

坊主で筋肉質で作業着＋首掛け白タオルスタイルの有明よりも軍人らしい雰囲気を醸し出すイカニモな男性は下田虎次郎（しもだとらじろう）。
電子機器問屋『下田商会』の経営者兼従業員であり、有明と高校時代を共に過ごした『親友』でもある。
そんな、イカニモな虎次郎はまゆを細めながらは有明の後ろにいる鈴谷を見て
「お嬢ちゃん、このおじさん（有明）からいくら貰ってるんだい？」
と話しかけた。
「？？？いくら貰ってる？・・・・いやいやいや、援交じゃないからな？」
一瞬考え込んだ有明だが、意味を理解しジト目でツッコミに入れる。
「は？援交じゃなかったら、こんな可愛いお嬢ちゃんがお前みたいな頭イカレてるキモオタと一緒に買い物なんて有りえねーだろ？ことと次第によっちゃ、警察に通報も有り得るしな」
「なんか自分でも君の言い分に納得しちゃって悲しいんだけどーーーー彼女は部下だよ、新しく造られた隊で一緒に仕事してる仲間なんだ」
久しぶりの再会で冗談をかましてる有明と虎次郎を他所に鈴谷は「かわ・・いい？・・・はじめてそんなこと言われた・・・」と赤くなっている。
だがそんな冗談もつかの間、有明は「そんなことより本題なんだがーーー」と話を切

り出し
「虎次郎、品は注文通りに用意できたか?」
と用を済ませるべく虎次郎に尋ねる。
実はこの用事（仕事の買い物）を済ませたあと、有明は鈴谷を連れていきたいと思っている場所があるためここであまり時間を裂きたくない。
虎次郎も雰囲気を見越し、早速商談に取り掛かる。
「もちろん用意はできたが、大変だったんだぜ?品数多いわ、1週間って期限付きだわで。現品で確認って訳にもいかない量だから、見積書で確認してくれ。総額で６００万ちょっとな」
有明は虎次郎から見積書を受け取りサラサラと確認していく。
「これもよし・・あれもよし・・うん、大丈夫そうだな。請求書をグアム分基地総務課宛に送っといてくれ。品物は呉の輸送艦くにさき宛に宅配で頼む」
「了解、それじゃあここに確認のサインを」
「おけおけ、海軍大尉　有明誠っと」
虎次郎に促され有明は見積書の内容に問題がない旨の署名を書き込む。
「じゃあ、あとはよろしく頼む」
「はいよ」

ほんの短時間で有明と虎次郎の商談はまとまったようだ。
「鈴谷、用は済んだから次行くぞ」
「はーい。次はどこいくの～？」
「次はな、鈴谷の私服を買いに行くぞ」

2―5任命！ポーンペイ派遣隊

ＨＯＮＤＡＳ６６０という車をご存知だろうか？
タルガトップタイプ（二人乗りのオープン）のスポーツカーで空力特性の良さそうな流線型のシルエットが特徴な車。
だが、この車もうひとつ特徴があり、それはスポーツカーながらに『軽』自動車でもある点だ。その車体は他のスポーツカーと並んだ時に隠れてしまうほどの小ささ。
全長約３．４ｍ、全高も約１．２ｍ。
この車をひと目見て昨年、即購入した１人の海軍士官はルームシェア仲間の３人から共に『こいつ、車までロリ買いやがった、このロリコンめ』と呆れられていた。
その海軍士官の名はーーーー言わずしても分かるだろう。

＊　＊　＊　＊　＊

助手席に鈴谷をのせた有明の愛車Ｓ６６０は黄色いボディを輝かせながら、首都高速９号線を辰巳ＪＣＴへ向けて（安全な速度で）爆走している。

「ひょ～やばーい！・チョー気持ちいい！・海を航行してる時とはまた違う感覚だよ～！」

鈴谷はアゲアゲなテンションで首都高速ドライブを楽しんでいる。

下田商会で商談を終らせた有明と鈴谷は有明の提案で鈴谷の私服を買いに行くことになった。

艦娘学校とポーンペイで缶詰だった鈴谷はオサレな服屋に行ったことがなく、制服と海軍支給の服しか持っておらず私服を持っていないのだ。

そこで有明は二回も裸を見てしまった謝罪の意も込めて、鈴谷に服を贈ることにしたのである。

二人がやってきたのは東京の臨海部にそびえ立つ大型商業施設『アーバンドック　らぽーと豊洲』。

その名の通りちょっと前までそこはドック、つまり造船所（IHI東京第一工場）があった場所で今現在、海軍の第一線で活躍している巡洋艦『ちょうかい』や駆逐艦『あけぼの』などがこの土

地で造られた経歴をもつちょっと変わったショッピングモールである。
有明は鈴谷を連れて女性向けの洋服店を数店回り、マネキン人形が着飾っていたおすすめのコーデや店員さんに見立ててもらった物を片っ端から買い漁った。
買い物を始めた最初の頃は
「どっどうかな・・・司令。似合ってる?」
「おっおう、似合ってるぞ」
的なうぶいやり取りもあったが、今や鈴谷は店員と有明の着せ替え人形と化している。
鈴谷は「こっちの組み合わせもいいんじゃないでしょうか〜」とやたらテンションの高い店員にコロコロ衣装を替えられ、有明も「おぉー似合ってる!かわいいな〜。これも貰おうか」と二つ返事で即買い。
ハイスピードで散財していく。
そう、有明は『親バカ』ならず『艦娘バカ』な一面を持っているのだ。
有明の場合、艦娘の研究をするにつれて壮絶な過去や艦娘ゆえの苦悩など、色々なことを知り『艦娘バカ』となってしまった。
実は第五研究室から追い出されたのは一度、艦娘から距離を置いたほうがいいのではという配慮によるものだったりするのだ(実際は幕張提督嫌われているので転属後すぐ

に窓際部署・補給係に追いやられ、また艦娘である電と一緒に仕事をすることになったが)。

結局持ち帰れないほど購入してしまったので、服は宅配サービスで秋葉原のシェアハウスまで運んでもらい鈴谷は今まで着ていた制服から購入した服の中で1番気に入った(有明が特にかわいいと言ってくれた)白系のトップスにブラウンチェックの長めのフレアスカートとベレー帽を被った春仕様お嬢様コーデへ衣替え。

二人は服を買うという第一目標を達成したので、お腹を満たしに海を眺めながら食事を楽しめるフードコートへ向うことにした。

その道中で有明は大きいほうのトイレへ行きたくなったので、鈴谷に待っててもらい腹を抱えながらトイレ駆け込んで行った。

するとどうだろうか。

童顔JK風の顔立ち、日本ではまずお目にかかることのないアクアマリン色のつやのある髪、そしていつもの制服だと着痩せしているのであまり意識が向かないが、鈴谷は重巡系ではトップクラスのメロンをお持ちなのである。

それが白いトップスでさらに強調されているのだ。

そんな可愛い子が1人で突っ立っていたら、待っている未来はただ一つ。

「ねぇねぇ、おねぇちゃん1人?今暇なの?一緒に遊びに行かない?」

チャラい男3人組がナンパをしてきたのだ。
きっと外国人と勘違いして、絶好のカモだと考えたのだろう。
ガラの悪い奴らからのいやつ的な迫り方に、鈴谷は怖くなって声を出せなくなってしまっていた。
そうこうしている間にもチャラい3人組は
「ね～遊びに行こうよ～！あっご飯まだなの？俺、いい店知ってるんだよね」
と言いながら鈴谷にボディタッチをするなど、馴れ馴れしく迫ってくる。
だが、鈴谷は体を思うように動かせない。
艦娘である時は絶対に支配されることの無い恐怖に支配されているからだ。
「・・・た・・・たすけて」
辛うじて掠れそうな声で鈴谷がその言葉を捻り出したその言葉を無視し、男達は鈴谷を連れ去ろうと強引に迫り寄るーーーーーーが、トントンと男達3人組内の1人が肩を叩かれ
「ーーーー君たち、今すぐどこかへ消えなさい」
と低く且つ怒りのこもった声色で話しかけられる。
チャラい男3人組に声をかけたのは大きいほうのトイレから帰ってきた有明。
彼は魂の抜けたような詰めたい目線で男らに警告した。

もちろんそんなもので男らは引き下がる訳がなく、むしろ有明の言い方に腹が立ったようで
「あぁ誰だテメ、しゃしゃり出てくるんじゃねぇよ。喧嘩売ってんのか？3対1でやるか？あ？」
と食ってかかり、有明の胸ぐら掴んで今にも殴りかかりそうな雰囲気となった。
有明は「はぁ」と小さいため息をつきながら
「一応、君たちのことを心配して言ったんだけどねぇ」
と前置きをして男らに告げる。
「お前らを殺るのは、私ではない。ーーーー鈴谷」
有明は鈴谷ほうを向き、ひと間空けてから冷たい声で命令を出した。
「艤装の展開を許可する。但し、火器類その他一切の兵装は使用禁止。現時刻を持って正当防衛行動を開始し、必要最低限の武力行使にて敵を制圧せよ」
胸ぐらを掴んでるチャラい男が
「アア？何ブツブツ言ってんだよ」と言ったーーーーいや、言いかけていたが、男はそのセリフを言い終える前に腕をものすごい力で有明の胸ぐらからひっぱかされ、そのまま前にバランスを崩した際に背中からねじ伏せられ顔面から地面に打ち付けられる。
男をねじ伏せたのはもちろん、鈴谷。

ただし、可愛らしい私服を身に纏う鈴谷ではなく艦娘ーーーー航空巡洋艦の鈴谷の艤装と制服を身につけた彼女の本当の姿。

「了解だよ、司令」

そう言って鈴谷は残りの二人もいとも容易く片付ける。

焦って抵抗しようとした男らはかえって変に力を入れることになり、艦娘化した鈴谷にとって彼らを制圧することは蟻を踏みつけるよりも簡単なことだった。

「司令、終わったよ」

「・・・・」

有明は返事はせずにうなづいて了解の意を返したのだった。

＊　＊　＊　＊　＊

個体差はあれど艦娘は制服を纏い、艤装を展開している間は『兵器』としての性能を発揮する為に通常の人間が持つ精神状態とはかけ離れた心を持つ。

敵を沈めても恐怖を感じないし、自分の体がボロボロにやられても心が折れずに敵に立ち向かえる。痛覚だって痛みを感じない訳では無いが、麻痺寸前レベルまで強制的に強化されるのだ。

また装備展開をすると力にも変化が現れる。

艦だったころの姿を想像させるようなパワフルさを持ち、某毛利探偵事務所の女子高生のように電柱を折るなんて朝飯前だ。

ただ、艦娘は艦であり兵器。

艦娘にいくら意思があろうと指揮者の命令が無ければ動くことができない。

命令がないと艤装を展開しようと思っても展開できない仕組みになっている（原因不明）。

だから、有明はナンパ男に捕まっている鈴谷に艤装を展開し制圧するように命令した。

ただ、その命令は個性豊かな娘を戦闘兵器へと変えてしまう。

先程の鈴谷の状態では恐怖心を無くしてあげるために仕方がない面もあったが、有明は個性豊かな艦娘を戦闘兵器へ変えてしまう『命令』を出す度に、軍人としてでは無く人間として自分を殴り倒したい気分になるのだった。

＊　＊　＊　＊　＊

鈴谷が制圧したナンパ男達は有明の通報で駆けつけた、警視庁の警察官（に扮した海軍警察隊艦娘担当官）が連行して行った。

一方、制圧した側の鈴谷はいつもの制服姿で今にも泣きそうな顔をしている。

それはナンパ男が怖かったからではない。

先程まで着ていた1番気に入っていた服が装備を展開（艦娘へ変身）したことにより、消えてなくなってしまったからだ。

実は装備展開は下着姿でやらないと、変身した際に変身前の服を消してしまう。

その為、通常は自室や更衣室で装備展開をするのだ。

「しれい・・・ごめんね・・・せっかく買ってくれたのに」

「気にするな。服は他にもたくさん買ったし、生きていればこの先、もっと良いものにも巡り会える。それよりも怖い思いをさせたな、ごめんな鈴谷」

「でも！でも！かわいいって言って貰えたあの服が・・・」

「そんなに気にするなって。服より鈴谷の方が大事だから」
「それでも!」
「いいから、今日は帰るぞ?」
「・・・・うん」
　それから無言で帰路についた二人だったが、秋葉ハウスに到着してから、有明は鈴谷を元気づけようと「ゲームを一緒にやらないか?」と勧め、今までそんな物に触ったことの無かった鈴谷はドハマりし、毎晩徹夜上等でスイッチだのプレステだのを二人で遊んでいたので、こっぴどく暁子に怒られたそうな。
　一週間の休暇では怖い思いもしたが、全体的に見ればたくさん服も買ってもえてゲームの楽しさも知れて鈴谷にとってはひと春の思い出となったと言っても過言ではないほどいい経験となった。
　また、この徹夜上等ゲームでゲームの沼に浸かった鈴谷はのちのポーンペイ鎮守府のゲーム同好会部長になるのだが、これはもうちょっと未来のお話。

＊　＊　＊　＊　＊

1週間の休みがあけ、出勤日となった有明・電・鈴谷は再び海軍厚木航空基地へと集結した。

3人は厚木基地の総務の人に案内されながら、庁舎内を移動している。

「電、青森の姫希は大丈夫だったか?」

「全く大した事無かったのです～。もともと艦娘時代からおっちょこちょいな性格だけど丈夫な体が取り柄だった姉なので」

「そうか、それは良かった」

しばらく歩くと総務の人がある部屋前で足を止め

「有明大尉、電さん、鈴谷さんこちらの部屋です」

と告げながらドアを開けた。

そのドアの先にいたのは、これから仲間となる軍人と艦娘。

そこまで広い部屋では無いが、演台があり、何列かに別れて椅子が並べられていて、これから式典が行われるのはこの様子を見れば誰でも分かるだろう。

これから行われるのはポーンペイ派遣隊の発足・出発式典。

有明率いるポーンペイ隊は派遣隊という常設部隊となったため、その発足と出発式が慣例通りここ厚木航空基地で執り行われる。

やはり、こういったことをきっちりやるのも海軍の伝統であろう。

式典が行われる部屋では椅子の前に全員が起立をし、室内なので脱帽してるため頭を10度下げる敬礼で有明を出迎える。

有明が「座っていいよ」と声をかけると室内にいた全員が一斉に着席し、背筋を伸ばした。

これぞ軍隊と言った感じだ。

電と鈴谷は敬礼をしてきた人達と同じ列の空いていたパイプ椅子に着席し、有明は総務の人の先導で演台横の椅子に着席する。

演台横には2席用意されており、一席が厚木航空基地司令用、もう1つが有明用だ。

既に厚木航空基地司令は着席しており、部屋に入る有明顔を見ると睨みを効かせている。

司令の名は海軍少将、幕張将太郎。日本海軍東部方面艦隊厚木航空群の指揮官で、あの横須賀鎮守府提督の弟でもある。

パイロット上りの将校で、艦娘の存在やその艦載機などを得体の知れないモノとして毛嫌いしている。

無論それを研究している有明も大嫌いだ。
総務の人が司会席に移動し「只今より、ポーンペイ派遣隊発足・出発式を始めさせていただきます」を開始した。
式自体はフォーマット通りに執り行われる為、特に問題なく淡々と進行する。
「では、これより任命を行います。有明隊長は演台へお進み下さい。隊員は私が役職と名を呼びましたら、演台へ進み任命書の受領をお願いします」
有明は言われた通り国旗と軍旗にお辞儀敬礼し、演台へと進む。
この『任命』の題目でやる事は演台にあらかじめ用意されている役職・階級・名前が入った任命書を有明が卒業式の校長のように手渡ししていく。
総務の人が準備が整ったのを確認し、名前を読み上げはじめる。
「ポーンペイ派遣隊副司令兼艦娘整備長　海軍少尉　宮津（みやずしんまる）　新丸」
「はいっ」と威勢のいい返事をし、演台へ進んでいくのはポーンペイ隊２人目の士官にして叩き上げのおじさん、宮津少尉。年齢は４０過ぎたくらいで少し肌が黒めの海軍魂がこもってそうな男性だ。
「ポーンペイ派遣隊庶務　海兵長　宅野（たくのさち）紗愛」
次に演台へ向かったのは身長ミドル、頭髪ミドルヘアの女性軍人、宅野紗愛。主に事務全般を仕事とする庶務に任命された。

「ポーンペイ派遣隊付連絡官　海軍曹長　宮古まい（みやこまい）」

着任軍人のトリを飾るのは連絡官という何するのか分からない（少なくともポーンペイ派遣隊規模では絶対いらない）役職の宮古まい。もちろん、彼女は本当の海軍軍人では無く、清水グアム分基地司令調査のためＮＤＳが送り込んできたエージェントだろうと有明はすぐに理解した。

続いて、艦娘の任命。

「ポーンペイ派遣隊司令室付　教育担当艦兼事務　駆逐艦　電」

「ポーンペイ派遣隊　艦娘第一艦隊旗艦　航空巡洋艦　鈴谷」

最初にいつもの二人が任命され、続いて新任の艦が任命される。

「ポーンペイ派遣隊　艦娘防衛艦隊　駆逐艦　睦月」

「ハイ！」

元気いっぱいに演台に向かったのは、茶色と赤色が混ざったような美しい髪と目を持つ、幼めな少女の姿をした駆逐艦睦月。艦として建造された当時は強靭な魚雷を搭載したことにより駆逐艦の戦闘力を底上げした睦月型、そのネームドシップである睦月は艦娘になってもその能力を遺憾無く発揮している。

しかも、ポーンペイ派遣隊に着任した彼女は台湾からの前線帰りで経験も豊富。既に改二となっており凛々しい顔つきへと成長し、紺色のパーカーを着用している。

在台湾日本海軍・高雄基地からの転属で艦娘レベルは７４。
「ポーンペイ派遣隊　艦娘防衛艦隊　駆逐艦　霞」
「ハイっ」
ちょっと緊張で顔をこわばせながらも、胸張って演台へ進んで行ったのは駆逐艦霞。小学生の制服の様な衣服を制服とする彼女は横須賀艦娘学校を卒業したばかりの新米艦娘。艦娘レベルは２３。
「以上、士官1名、下士官2名、艦娘4隻が任命されました。続きまして隊長訓示。有明海軍大尉、お願い致します。」
隊員達が一斉に立ち上がり、登壇している有明へと視線を注ぐ。
有明は隊員達を見渡し、真剣な面持ちで訓示する。
「諸君、これから行く場所は前線の先であり、これから前線となる場所だ」
「現状、多大なる艦娘達の努力と現場で奮闘する貴官らの働きによって未だ大部分が未知の敵である深海棲艦に対して徐々に優勢な状況へと好転している」
「だが依然、北アメリカとの最短航路上の太平洋は敵の攻撃が激しく航路の安定化は見通しが立たない」
「ミクロネシアはそんな情勢下においてオセアニアやアメリカ大陸との海上輸送において防衛上極めて重要な防衛拠点になる事は間違え無いと言えるだろう」

「よって本派遣隊はその為の前線基地構築を主任務とる訳だが、将来的にはそこを軸とした更なる前身が望まれる」
「故に諸君らには深海棲艦から世界を救う為の軸・・・詰まる所、鎮守府を作る気で任務に望んでもらいたい。以上を訓示とする。
横須賀地方隊グアム分基地ポーンペイ派遣隊
司令　海軍大尉　有明誠」